宇宙(そら)は賑やか

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙（そら）は賑やか

【Ｎコード】
Ｎ６８３８Ｔ

【作者名】
台風Ｘ号

【あらすじ】
ハッピーツリーワールドシリーズ番外編。今までのストーリーの共通点が暴かれる。淋無喜有と台風に巻き込まれてとは違い、原作を変えてみました。今まで空気だった台風Ｘ号オールスターズのオリキャラ達も登場します。第二期より、さらにヒートアップします。

第一話　世界と宇宙がデジデストロン連合の元に

ライム達は地球に遊びに行こうとしていた。

「置いてくぞトピ！」

「ちょっと待ってよライム君～」

宇宙船に乗り込んだライム達は気が付いていなかった。

宇宙と地球の現状を。

一方地球は、大変なことが起きていた。

「キャー来ないで。」

「捕まえて捕虜にしろ！」

「カストロフィーカノン！」

少女を追いかけまわしたデジモンは消滅してデジタマになった。

「大丈夫か？」

「はいっ、何とか。」

彼は、ダークネスウェーブのジェネラル。深海（ふかうみ）サイクロン。ディアボロモン達と行動をとる偽悪者である。

「リロード、ギズモンズ！」

クロスローダーからギズモンＸＴ達が姿を現した。

「ディアボロモン、デジクロスだ。」

サイクロンはそう叫ぶとディアボロモンは了解の合図を出した。

「よしっ、ディアボロモン、ギズモンズ！デジクロス！」

「デジクロス、ディアボロモンＸＴ！」

ディアボロモンＸＴは、更に来るテラーコンデジモンを確認した。

「殺れ！」

「デジデリートファイナリクス！」

赤い光線がテラーコン集団に襲いかかった。

テラーコンデジモンは、デジタマごと消滅していった。

「よし、クロスオープン。」

ディアボロモンは、ギズモンズにバックドロップをした。

ダークネスウェーブの捨て駒にしかならない様である。

「ディアボロモン戻れ！」

「サイクロン、今回の収穫はいまいちだった。」

「そうだな。大物が出てくれば良かったが雑魚だらけじゃないか。」

欲求不満は偽悪者の敵なのだろうか？

一方、宇宙船では・・・

ライム達は、何事も無いかのように地球に進んでいた。

しかし、そのあとをつけてきたデジモンがいた。

「ガスケットモン、俺達の領地に来てはいけない船があるぜ。」

「撃ち落とすか。ダークネスローダーデジクロス！」

ガスケットモンは、テラーコンデジモンを強制デジクロスさせた。

メガガスケットモン　クロス体　必殺技「トリプルレーザーアタック」

アームバレットモンは喜んでいた。

「すげぇ、俺も強制デジクロスしたい。」

「お前の分も残しとけばよかった。」

「殺っちゃって！」

「良いぜ！トリプルレーザーアタック！」

３つのビームが宇宙船目掛けて飛んできた。
船は自動的にシールドを張った。
しかし、シールドの力が弱くてシールドを張る装置が壊れてしまった。
「まずい、何かが２体近付いてくるよ。」
「僕、怖くてどうにかなりそう。」
トピが弱音でそう言った。
「アームドレックス！」
「トリプルレーザーアタック！」
宇宙船が壊れて、地球に不時着することになってしまった。
「みんな、衝撃に備えて！」
メガガスケットモンとアームバレットモンは、ハイタッチをした。
宇宙船が不時着しそうになったところを確認した大次は、コンボモンを呼びたした。
「大次、宇宙船を俺が止めろというのか。」
「そうしないといけない。」

「分かったぜ。」

「ＥＮＥＲＧＯＮ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

「ｌｉｎｋ　ｕｐ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」

「オプティマスプライモン、フライトモン。リンクアップ進化、オプティマスプライモンフライトモード！」

オプティマスプライモンフライトモードは、宇宙船を押さえた。

「いま、ゆっくりとおろしてやるからな。」

そこに、別のデジデストロンが近づいていた。

ショックフリートモンである。

「くっ、こんなときに。」

「オプティマスプライモン。宇宙船ごとぶっ飛ばしてやる。」

「スリービクトライズ！」

逆に、ショックフリートモンが吹っ飛ばされた。

「シャウトモンＸ４か。助かったぜ！」

「俺達、いいコンビが組めそうだな。」

「たぶんな。」

オプティマスプライモンフライトモードは宇宙船を地上に下ろした。

「でかした！オプティマスプライモン！」

「ああ！」

中では、どうなっているかが問題である。

第一話　世界と宇宙がデジデストロン連合の元に（後書き）

次回　第二話　アニマル星から来た者。お楽しみに！
ＯＰテーマ「離さない絶対」
ＥＤテーマ「晴れることを信じる」
アニマルフレンズを二次創作したのは初めての試みです。台風の進化を見届けてください。誤字がおそらくありそうな気がしますので誤字を確認しましたらご報告願います。
このシーンが面白かったというところがありましたら感想をください。

第二話　アニマル星から来た者

シャウトモンＸ４とオプティマスプライモンは敵が来ないかを監視していた。

その間に大次とタイキが宇宙船の中に入った。

「誰かいませんか？」

「いるよ。」

アニマル星の者達は無事だが、宇宙船に自爆装置が作動していた。

「タイキ、急ぐぞ！」

「みんな、こっちだ！」

「分かった。」

大次達が、６００メートル先に離れた後、宇宙船が爆発した。

「危なかったな。」

ライムはため息をついた。

此の事態にマグナスモンと左利がやってきた。

「みんな大丈夫？」

「ああ。」

トピは、尻尾で右ひざを隠していた。

「トピちゃん、どうしたナリ？」

「右ひざを擦りむいただけだよ。」

ライムがトピのしっぽをどかした。

「血が滲んでいるぞ！」

「だって・・・」

その時、ガスケットモンとヴィーコンモンズとミノタルモンズとドリッピンズがやってきた。

「あいつがオレ達の船を壊した奴だ。」

タイキ達は、ガスケットモンを絶対に許さない気持ちになった。

シャウトモンＸ４は怒りの鉄槌を食らわそうとしていたのだが・・・

「ダークネスローダー！」

「なにっ！デジテストロンがバグラ軍のダークネスローダーを。」

「デジクロス！」

ヴィーコンモンズとミノタルモンズとドリッピンズがガスケットモ

ンの体に取り込まれた。
ガスケットモンユナイテッドモード　クロス形態　必殺技「スパークファイナルレーザーアタック」
「スリービクトライズ！」
「スパークファイナルレーザーアタック！」
ガスケットモンの攻撃がスリービクトライズを弾き飛ばしてシャウトモンＸ４に命中した。
「うわぁあああ！」
「シャウトモンＸ４！」
「ここは、私に任せろ！マグナスモン、ゴッドマグナスモンになって私と合体だ！」
「分かった。左利行こうよ。」
「ええ。」
「ＥＮＥＲＧＯＮ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」
「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」
「ｓｕｐｅｒ　ｌｉｎｋ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」
「オプティマスプライモン！」「ゴッドマグナスモン！」「スーパ

ーリンク！オプティマスプライモンスーパーリンクモード！」

「行くぜー！」

ガスケットモンユナイテッドモードは、ドリッピンの剣を左手に持った。

「ハイドロブレード！」

「くっ！」

「オプティマスプライモン、スターモンズをデジクロスさせるぞ！」

「サンキュータイキ！」

「オプティマスプライモンスーパーリンクモード！」「オッシャー！」

「スターモンズ！」「はーい、イェーイ！」

「デジクロス！」「デジクロス！」

「オプティマスプライモンスターソード！」

「デジクロスしても同じことだぜバーカ！スパークファイナルレーザーアタック！」

オプティマスプライモンスターソードは、レーザー攻撃を払い除けた。

「なにっ！ならばハイドロブレード！」

「無駄だぜ！」

「なにっ！」

「おりゃ――！」

「俺のハイドロブレードを。」

「これでも食らえ！ビクトリーセイバーバーストアタック！」

「そんな馬鹿な！うわぁ―」

ガスケットモンは、消滅した。

夕方になり、ライム達は、タイキ達に話した。

「俺達もクロスハートに入れてくれ！アニマル星もこのままじゃほっとけないんだ。」

「ああ、君達もクロスハートだ。」

左利と大次も喜びの笑みであった。

みんなは今回の戦いを機に、デジデストロンとバグラ軍が統合したことを知った。

一方、その戦いを遠くから見ていたサイクロンは・・・

「ふっ、ガスケットモンの強さが分かった。」

「サイクロン、クロスハートという者達は何を考えているのだ？」

「平和だな。俺たちと同じ。ディアボロモン奴等と合流できるかもしれない。近いうちにな。」

「そうだな。そろそろ帰ろうか。」

「ああ、リロード、メタルヴァンデモン。」

「サイクロン殿、お呼びですか。」

「戦闘機に変形して、帰るぞ。」

「分かりました。デジタルトランスフォーム！」

サイクロンは、戦闘機に乗って帰って行った。

その頃クロスハートは・・・

「バグラ軍とデジデストロンが統合した！」

スパロウモンは、目が点になっていた。

トピとレイキーは、スパロウモンを見ていた。

（乗ってみたいな・・・）

コンボモンは、シャウトモンとグレイモンとキリハと一緒にいた。

「コンボモン、本当にまずいことになったな。」

キリハがコンボモンに聞いた。

「確かにだけど、俺は連合軍を倒す勢いがなければクロスハートに入った意味がないと思うんだ。」

「なるほど、そりゃおれも同感だぜ！なっグレイモン。」

「コンボモンの言うとおりだ。」

キリハも納得していた。

「男らしい発言をしたなコンボモン。」

「大か。俺達の考えが一つにまとまっている証拠を確かめたかっただけのことだ。」

「確かに、連合軍になってしまった以上はぶっ倒してやろうぜ！」

第二話　アニマル星から来た者（後書き）

次回　第三話　そのやり方がおかしい？クロスハート大騒動！。お楽しみに！

合体挿入歌「スーパーリンク&デジクロス」

今回もいい感じに仕上げていきました。トピが怪我を隠す場面を描きたいと思いました。ガスケットモンを無事に倒し、メイン組がクロスハート入りするところまで書いてて楽しかったです。サイクロンの行動がまだ読めていませんが敵ではないのでご安心を。次回もまた見てね！

第三話　そのやり方がおかしい？クロスハート大騒動！

バグラデジデストロン基地ネメシス本部

「メガトロモン、お前の部下が一人消えたぞ。」

皇帝バグラモンは、破壊大帝メガトロモンに話しかけた。

「大丈夫だバグラモン。お前のデスジェネラルの一人、レーヴァテイモンと我々のジェットストームモンズとオブシディアモンズを使い、クロスハートに大混乱をもたらす作戦を思いつきただいま実行中であります。」

「ほぉー、我々は連合軍らしさが見えてよい。」

一方、レーヴァテイモン達は・・・・

「デスデスデステース。」「アホカアホカアホカアホカ。」

「アー！イライラして堪らねぇ！ダークネスローダー、強制デジクロス！」

ジェットストームモンとオブシディアモンの半数がデジクロスした。

「アホデスカアホデスカアホデスカアホデスカ。」

「逆効果だったｏｒｚ」

レーヴァテイモンは開き直りクロスハートを思う存分だましたこと

に喜んだ。

「しかし、クロスハートの連中どもが馬鹿でよかったぜ！おい野郎ども？」

「そうですね！タモリモン。」

「俺はタモリモンじゃねぇ！レーヴァテイモンだって言っているだろ！」

ジェットストームモン達の目線が冷たかった。

「何だ、その冷たい目線は殺すぞ！」

一方クロスハートは・・・

「タイキ、覚悟！」

シャウトモンが暴れていた。

「どうなっているんだよ。」

ライムの爪でシャウトモンを取り押さえるも失敗する。

「くそー。」

グレイモンやアグモン達もおかしい状態であった。

「なにが起きたんだ。」

「解析不能、ガオモンも様子がおかしい。」

「もー最悪なんですけど。」

「クダモン、目を覚ましてくれ！」「嫌なこった。だって人間信頼できない。」

薩摩は、ショックを受けていた。

拓也達は、周りの状況が分からなかった。

「良いよな、デジモンになれる人間は・・・そうか、ジャック！」

「どうした？大次。」

「ジンライモンになって、原因を調べてくれ。」

「ああ、分かった。プリテンダースピリットエヴォリューション！ジンライモン！」

「頼むぞ！」

「任せろ！」

ジンライモンの姿を見た拓也達もデジモンになり、原因を調べることにした。

「俺達も行くぜ！」

「大勢いれば助かるぜ。」

屋上にバグラデジデストロン軍の者だと思わしき物体があった。
「これがデジモンと人間の信頼性を断ち切っていたのか。」
「よし、そいつは俺が壊す。おらぁー！」
ヴォルフモンの拳で装置が破壊された。
みんなが元通りになった。
原因をみんなに話したジンライモンは、ジャックに戻った。
「俺達の絆を裂こうとしたバグラデジデストロン軍め許せん。大次！」
「ああ、許しはしないぞ。」
一方、レーヴァテイモンは・・・
「そろそろ、奴等の絆が木っ端みじんになった頃、くくく。」
「アホカ。」「アホデスカ。」
「アーうるさいお前等・・・なにっ！」
クロスハートは全員無事であった。
「クロスハート、まだ解散していなかったのか。」

「そうですね！」

「ジェットストームモン、貴様等は黙っていろ！」

「黙れはこちらのセリフだ。」

「おうっ！」

「ＥＮＥＲＧＯＮ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

ほかのみんなも究極体に進化した。

シャウトモンはＸ４になった。

「行け！ジェットストームモンロードモード！」

「アホデスカ！」

「バーニングスタークラッシャー！」

「ゴッドハリケーンインパクト！」

「コキューストブレス！」

「メガデス！」

「ファイナルエリシオン！」

「炎龍撃！」

「シャインカッター！」

クロスハートの圧倒的パワーでねじ伏せられていた。

「ならばこれならどうだ。ダークネスローダーデジクロス！」

ジェットストームモンズとオブシディアモンズがレーヴァテイモンに取り込まれた。

「レーヴァテイモンダークモード！」

「しまった！デジクロスされた。」

オプティマスプライモンは、マトリクスキャノンを撃ちまくったが、レーヴァテイモンには効かなかった。

「効かないぜ。暗黒斬舞！」

オプティマスプライモンに襲いかかろうとした時、一つの斧に邪魔にされた。

「誰だ！」

「ガッポガッポ、おー、オレーグモン！」

「オレーグモン。」

「待たせたなクロスハートの諸君。」

「オプティマスプライモン、俺とデジクロスしてくれ！」
「ああ、このままでは弱いからな。大次とタイキ！」
「うん！」
「オプティマスプライモン！」「オッシャー！」
「オレーグモン！」「ガッポガッポ！」
「デジクロス！」「デジクロス！」
「オプティマスプライモンパイレーツモード！」
「そんなデジクロスなんて無駄だ！」
「それは、どうかな。おりゃ！」
レーヴァテイモンの左肩が粉砕された。
「くっ、よくも。」
「クロスハートをよくも絆を断たせようとしたな。私は貴様を倒す。オートボットラインバースト！」
レーヴァテイモンは、大きく吹き飛ばされた。
「耐えてやる！うわぁ！」
「オーバーマトリクスキャノン！」

「秋葉原ぁぁぁぁぁぁ！」

レーヴァテイモンは消滅した。

「クロスハート入りしたんだオレーグモン！」

「そうだぜ、ガッポガッポ！」

ライム達も嬉しい気分であった。

「これでまたムードメーカーが増えたな。」

「ああ！」

第三話　そのやり方がおかしい？クロスハート大騒動！（後書き）

次回　第四話　トピの災難！イジェクタモンの罠。お楽しみに！
オレーグモンを味方にしたかった感じがありました。デジモンのキャラクターがかなり増えました。ライム達は空気でしたが次回は大活躍します。今回は、ギャグ回でもあります。

第四話　トピの災難！イジェクタモンの罠

トピは楽しく夜の散歩をしていた。

「あっ」

トピはクルッポを見つけた。

「クルッポ君、ミアちゃんの所にいたはずだけど・・・」

クルッポは、実はイジェクタモンが化けていたのである。

「くひひ、人質ゲット。」

「えっ？」

シートベルトが突然トピを拘束した。

「心配するなトビウサギちゃん。君はすぐには殺さん。カードラモン、トビウサギを乗せていけ！」

「はい分かりました。」

「助けて・・・うっ・・・」

トピは口にロープを貼られ叫べなくなった。

イジェクタモンはカードラモンに乗り込んだ。

トピは、抵抗するもカードラモンの催眠ガスを浴びて眠ってしまった。

「行くぞ、カードラモン！」

「イジェクタモンのためならどんな場所も平気だぜ！」

デジデストロンのエンブレムを持っているカードラモン。

ひのまるは、トピがいないことに一足早く気がついた。

「トピがいなくなったナリー！」

「夜の散歩から姿を現さないなんておかしい。」

「俺達で見に行こうぜ！」

「おう！」

ライム達はトピを探すためにトピに持たせたＧＰＳを頼りに動いた。

「おかしいナリ。動きが早いナリ。」

「まさか、車に連れてかれている！」

「急いで行った方がいいぜ！」

カードラモンは、渋滞している道路にイライラしていた。

「はよ、どけよ！イジェクタモンどうしよう此の渋滞！」

「お前必殺技があるだろ！馬鹿だろお前。」

「あっ、そうだった。スピードテロ！」

「誰か助けてー！」

「危うく轢かれそうになった！」

「俺の大切な車がー！」

「渋滞を起こしているから悪いんだよ！」

カードラモンは、４匹の動物と青沼キリハに出会った。

「こいつ等誰だ。」

「しまった先を越されていたのか。しかも青沼キリハが先陣を。」

「返して貰おうかトピを。」

「トピちゃんを返さないのなら、俺達が相手だー！」

イジェクタモンはカードラモンから降りた。

「ダークネスローダーデジクロス！」

「トピを乗せたままデジクロスだと！」

「イジェクタモンアルティメットモード！」

トピは、イジェクタモンの頭部にいた。
「キリハは、援護してくれないか。」
「ああ、良いぞ。援護はしてやる。」
「有り難いぜ！此の骨でも食らえ！」
イジェクタモンの腹部を骨で殴った。
「小癪な！インディクブレーザー！」
ライムとひのまるは軽やかに避けた。
「爪の攻撃を食らえ！」
「くっ！」
「火を食らうナリ！」
イジェクタモンが油断をしていた時、ウルーシュがトピを保護した。
「今、助けたぞ！」
「ウルーシュその剣をこっちに。」
「ああ！受け取れライム！」
剣を受け取ったライムは、グレイモンに投げてもらって一気にイジ

エクタモンの心臓部を貫通した。
「動物如きにやられるとは。ぐわぁぁあああ！」
イジェクタモンはデジタマを残して消滅した。
ひのまるはデジタマを消滅させた。
トピは目を覚ました。
「レイキーくん。みんな！」
「お前のこと心配してやってきたんだぞ！トピ。」
「キリハ君もありがとう。」
キリハは少し照れ顔になっていた。
「どうした？キリハ」
「グレイモン、気にするな。」
「すまないキリハ。」
一方その頃・・・・
「良いぞ！ナイトリックモン。」
「お前もだよサンジャックモン。」

「オッシャー！」

此の二人はいったい何者なのか？

第四話　トピの災難！イジェクタモンの罠（後書き）

次回　第五話　ダークネスウェーブ、クロスハートの前に現る。お楽しみに！

激闘挿入歌「メイン組の心は炎のように舞う！」

ライム達の活躍を作らせていただきました。アニフレだってデジデストロンを倒せます。トピがさらわれたのは夜の散歩中にどんな奴が狙っているのかを描写したかったからです。ところで終盤でナイトリックモンとサンジャックモンが出てきましたが、デジモンバベル☆ドリーで登場しているナイトリックモン。8月3日に連載決定しているデジモンインデックスにサンジャックモンが登場しています。

第五話　ダークネスウェーブ、クロスハートの前に現る

トピは目を覚ました。

「うっ・・うんっ・・・ライム君とみんなとキリハ。」

「トピ、あまり夜の散歩しちゃだめナリよ。」

「そうだぜ、何処かにバグラデジデストロン軍がいるか分からねぇからな！」

「迷惑かけてごめんなさい。」

トピは、何かを持っていた。

「トピ、それは？」

メモリーチップみたいなものが落ちていたんだ。

「デジメモリだ。ディアボロモンカストロフィーカノン？」

その時、バグラデジテストロン軍の新手が現れた。

マジンザラックモンとナイトスクリームモンとテラーコンデジモンズとマイクロモンズである。

「こんなときにまたか。」

タイキ達が駆け付け早速戦闘となった。

「シャウトモンＸ４は、マジンザラックモンを。」

「分かった。」

オプティマスプライモンは、ナイトスクリームモンに攻撃をしようとした。

「俺を倒すことはできはしない。」

ナイトスクリームモンは、体を消した。

「なにっ！」

「ブレイクナイトストーム！」

「うッわぁぁぁ！」

「オプティマスプライモン！」

マジンザラックモンとシャウトモンＸ４は激闘を繰り返すもシャウトモンが負けてしまった。

「なんて強い敵なんだ。」

「グレイモン、メイルバードラモン！デジクロス！」

「メタルグレイモン！」

ナイトスクリームモンは、マイクロモンズを呼び出した。

「ダークネスローダーデジクロス！」

「リードマンモン！」

「トライデントアーム！」

「サイクロカッター！」

二つの技が相殺した。

テラーコンデジモンは、一気にライム達に襲いかかろうとしたがウォーグレイモンとシャイングレイモン達に食い止められていた。

「数が多い。」

「しょうがない、一気に攻撃するぞ！」

此の騒ぎに一体の戦闘機が近づいていた。

「マジンザラックモン、飽きてきたから一撃で倒すぞ。」

「ああ、ナイトスクリームモン！」

「ヴァンパイアミサイル！」

「なにっ！」

タイキ達は、戦闘機に乗っている人物を見た。

「誰なんだ？」

「リロード、ディアボロモン、ムゲンドラモン！」

ディアボロモンとムゲンドラモンは、リードマンモンを踏みつぶして消滅させた。

「こいつ、ダークネスウェーブのジェネラルではないか。」

「ああ、そうだ。ディアボロモン、ムゲンドラモン！デジクロス！」

「ディアドラモン！」

マジンザラックモンは、ディアドラモンをひねりつぶそうとしたのだが・・・

「カストロフィーデストロイヤー！」

「馬鹿なぁぁぁぁぁぁ！」

マジンザラックモンは消滅した。

ナイトスクリームモンは、退却した。

「君達の敵ではない。俺達の敵だ。」

第五話　ダークネスウェーブ、クロスハートの前に現る（後書き）

次回　第六話　ディアドラモン強し、レジェンドフレンズ全員集合！。

合体挿入歌「ダークネスウェーブ静寂轟け！」

ダークネスウェーブとクロスハートがついに合流。ここでのディアボロモンは世代不明です。本来の設定、究極体は廃止されています。ムゲンドラモンとのデジクロスに関して皆さんに考えてほしいことがあります。ディアドラモンの姿をこうなんだぜ！ってかんじです。Ｐｉｘｉｖに描いてくださった方は嬉しくブックマークに登録します！

第六話　ディアドラモン強し、レジェンドフレンズ全員集合！

「君達はここにいる場所ではない。」

サイクロンがそう言った。

シャウトモンＸ４とメタルグレイモンは、ディアドラモンに襲いかかるが・・・

「クロスオープン！」

ディアボロモンとムゲンドラモンに分かれてシャウトモン達を圧倒させた。

「俺達は、ダークネスウェーブ！そしてジェネラルの深海サイクロン殿だ。」

ディアボロモンは自己紹介した。

「俺の代わりに言うなとあれほど言ったのになハハハハ。」

「すまないなサイクロン殿。グフフフフ。」

「お前達は、敵か味方か。どっちなんだ。」

「レジェンドフレンズ連合軍にクロスハートを入れようとしている。つまり味方だ。」

そう言った後、サイクロンはレジェンドフレンズ連合軍を呼びたし

た。

「此の13人がレジェンドフレンズなのか。」

「タカト、あそこにリョウがいる。」

「ホントだ。おーいっ！」

「タカトとギルモンじゃないか。」

「知っているのか。」

「一度手を組んだことがあるんだ。」

「なるほど、ではレジェンドフレンズの13人を改めて紹介しよう。まずは、連合軍総司令官秋山リョウのジャスティスリード（銀の軍）、副司令は、深海サイクロンのダークネスウェーブ（紫の軍）、郷市カズヒサのエイトオブノーズ（緑の軍）、伊東ミズヒデのヒートショック（肌の軍）、トランドのアイスドラゴンタイガー（水の軍）、代野ハクのクリスタルメリット（金の軍）、零マサキのファイアゾーンブレード（紅の軍）、神童クロンのゴッドハード（灰の軍）、島田トーネのトンネリアス（茶の軍）、モトモナのサウザンドゼット（白の軍）、畠下クンビのヘッドリング（橙の軍）、春宮チヨコのフロートフラワー（桃の軍）、犬沢メイのダイレクトイエロー（黄の軍）がレジェンドフレンズだ。」

「よろしく！」

「ああ！」

一方、バグラデジデストロン軍は・・・

フォールンミレニアモンが身勝手に動き出した。

「まて！」

「俺は、お前等が嫌いだ。」

レジェンドフレンズ達を迎えたクロスハートは・・・

「これでまた賑やかになったな。」

「メイさん。」

「どうしたの、ネネさん。」

「デジモンを見せてもらえませんか。」

「良いよ、リロード、シルギモン。」

「シルギモンです。よろしくね。」

「僕はスパロウモン。よろしく♪」

第六話　ディアドラモン強し、レジェンドフレンズ全員集合！（後書き）

次回　第七話　偽悪の奇跡と死ぬなディアボロモン奇跡の超進化。
お楽しみに！
レジェンドフレンズ連合軍がクロスハートに入りました。勝てるがしないです。ちなみにレジェンドフレンズの中に、犬沢メイがいますが、実はｐｉｘｉｖで有名になっている某人物をジェネラルにしたバージョンでもあります。次回は、なんとディアボロモンが超進化します！

第七話　偽悪の奇跡と死ぬなディアボロモンの奇跡の超進化

フォールンミレニアモンが突然姿を現した。

「バッドエンドデストロイヤー！」

人間界の町が壊滅に近い状態になっていた。

オメガシャウトモンとジークグレイモンは、立ち向かうもフォールンミレニアモンにはかなわなかった。

みんなはボロボロになっていた。

「くっ、ディアボロモン。やつの注意を引けー！」

「わかったサイクロン殿。」

「オートキャノン！」

「ドヲァ！」

ディアボロモンも姿がボロボロになっていた。

「くっ、まだだ。ディアボロモン！末裔の意思を思い出して行けー！」

シルギモンとリキトモンは、メイに言った。

「私達も戦う。」

「ええ、デジクロス！」

「ツワードハンデモン！」

「トルネードビート！」

「効かない！」

ツワードハンデモンは、フォールンミレニアモンに攻撃を受けた。

「シルギモン、リキトモン！」

ディアボロモンは、フォールンミレニアモンにやられまくっていた。

「所詮お前らなぞ雑魚にしか過ぎない。」

体がぼろぼろになっているトピは、ディアボロモンを見て涙目になっていた。

「バッドエンドデストロイヤー！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「ディアボロモンー！」

ディアボロモンは死にかけていた。

トピは、左腹を手で押さえながらディアボロモンの右手に抱きついて泣いていた。

「トピ、ここにきてはだめだ。」

「嫌だ。死ぬならディアボロモンと一緒に死にたい。」

サイクロンは、トピの心に共感して涙を流し始めた。

「感動話に持ち込んでいるなら、ぶち壊してやる！」

「フォールンミレニアモン、貴様は俺が許さない！ディアボロモン！お前は一族の生き残りだ。死んだら駄目な存在！偽悪の奇跡を起こせ！」

「サイクロン殿。」

「サイクロン君の言うとおりだよ。だから死なないでディアボロモン君―！」

その時、サイクロンのクロスローダーが輝きだした。

「これは？」

タイキが言った。

「サイクロン、その光は超進化だ。クロスローダーを掲げろ！」

「Eという文字の超進化！よしっ！」

「ディアボロモン超進化！」

「ディアボロモン超進化！エクサアーマゲモン！」
「バッドエンドバーストキャノン！」
「効かないぞ！その攻撃は。」
「なにっ、黄金の黙示録になっただと。嘘だっ！」
「トピとサイクロンの気持ちが俺を超進化させてくれた。トピありがとう。」
「エクサアーマゲモン君。」
「サイクロン殿、一緒に戦おうトピと一緒に！」
「ああ！」
「ふざけるな！」
エクサアーマゲモンの両肩にトピとサイクロンがいた。
「行けるぞ！エクサアーマゲモン！」
「アルティメットフレア！」
「ウウウ！」
「すごいや！これが超進化の力だね！」
「まだまだです。トピ！」

「えっ？」

「こいつにめちゃくちゃにされた町の怒りを俺が仇として取ってやる！」

エクサアーマゲモンは左手で４つの円を描いた。

「くっ、貴様殺してやる！」

「ゴールデンハルマゲドン！」

「なっ！馬鹿な！うわぁあああああ！」

爆発音とともにフォールンミレニアモンは消滅した。

トピとサイクロンは、握手した。

「ディアボロモンに勇気を与えてくれてありがとう！」

「サイクロン君だって、僕が感じたのは末裔だからこそほっとけないという友情の力だよ。」

第七話　偽悪の奇跡と死ぬなディアボロモンの奇跡の超進化（後書き）

次回　第八話　クロスハートの休日。お楽しみに！
進化挿入歌「ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ＆ＤｅｇｉＸｒｏｓ　ｖｅｒ：ｃｙｃｌｏｎｅ」
いきなりの展開でごめんね。でもこれが一番いいかなと思ったんだ。
それとディアボロモンの超進化どうでしたか、次回は休日ですが、
少しドタバタしています。

第八話　クロスハートの休日

トピとレイキーは、一緒にいた。

「僕達の星が心配になってきたなー。」

「きっと大丈夫だよ。たぶんな！」

一方、アニマル星では・・・

「ゼイム、気が抜けねぇぞ！」

「分かっているってアグル！」

デビモンとアイスデビモンに囲まれているライバル組どうやらここの指揮者は、ネオヴァンデモンとブレイクグレイモンであった。

一方地球では・・・

犬沢メイとキリハがアイスを食べていた。

「デジタルワールドでは食べれなかったものがやっと食えた。」

「確かに、あの世界にないもんな。」

メイとキリハは、久しぶりのアイスを食べていた。

タイキと太一と大次は、トランスフォーマーデジモン達と一緒にあるものを作っていた。

「スタースクリームモン、そこのドライバーをとってくれないか。」
「これか。」
「サンキュー！」
「なぁ、ベルゼブモン。」
「どうしたんだスタースクリームモン。」
「彼等は、なにを作っているのだ？」
「宇宙船と言ってたな。」
「宇宙船？」
「レイキーの持つ、惑星通話用電話でソフロからＳＯＳという通話があったらしい。」
「それで、助けたいということで宇宙船を作ったのか。」
「そういうことだ。」
「てきたぜ！」
コンボモンが内部構造をバリスタモンに見せた。
「とても、綺麗にできている。」

クロスハートの半分が乗れる船である。

つまり、地球に残るものとアニマル星に行く者が決まる。

あみだくじで決めた結果、地球に残るジェネラルは、ジャスティスリード、エイトオブノーズ、トワイライト、ヒートショック、トンネリアス、ヘッドリング、フロートフラワー、ファイアーゾーンブレード、ゴッドハード、サウザンドゼットである。

アニフレのメンバーとともに、アニマル星に行く。

ネネは、スパロウモンをクロスハートに入れて、代わりにワイズモンをトワイライトに入れた。

「行ってきまーす！」

アドベンチャーチームとテイマーズチームとトランスフォーマーズチームもアニマル星に向かった。

「俺達は、地球に襲いに来る者たちを食い止めるぞ！」

「おお！」

アニマル星の周りを監視しているデジモンがいた。

「あいつは、アームバレットモンじゃないか。しまった、既にデジクロスして巨大化してやがる！」

「みんな、デジクロスだ。」

キリハの声でみんながクロスローダーを掲げた。

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモン、ピックモンズ、スパロウモン！デジクロス！」

「デジクロス！シャウトモンＸ５！」

「グレイモン、メイルバードラモン、デッカードラモン！デジクロス。」

「デッカーグレイモン！」

「ディアボロモン、ムゲンドラモン、ギズモンＸＴ！デジクロス！」

「ディアドラモンＸＴ！」

「レオニモン、クロッドラモン！デジクロス！」

「クロッレオニモン！」

「ノリコードモン、マロヴモン！デジクロス！」

「コードロヴモン！」

「シルギモン、リキトモン、スプレリモン！デジクロス！」

「ツワードハンデモンＰ３！」

「行けぇぇぇぇ！」

「おう！」

アームバレットモンジャイアントモードに、６体のデジクロス形態が立ち上がった。

はたして勝てるのか？

第八話　クロスハートの休日（後書き）

次回　第九話　アームバレットモンよ滅べ！トランスフォームするシャウトモンＸ６。お楽しみに！
ついに二つの惑星で起きる戦い。これはすごいことになりそうでほっとけない！次回、シャウトモンＸ５とスタースクリームモンがデジクロスします。スタースクリームモンはクロスハートに入っています。戦闘機に変形しますのでシャウトモンＸ６も戦闘機に変形します

第九話　アームバレットモン滅べ！トランスフォームするシャウトモンＸ６

６体のデジクロス形態は、アームバレットモンに攻撃をしようとしていた。

「今の俺様に勝てる者はいない。ヘルマッドクェイク！」

「うわぁあああ！」

「シャウトモンＸ５！」

「メタルグレイモン、シャウトモンたちの後ろに回って援護をしろ！」

「分かったキリハ。」

「ギガデストロイヤー！」

「くっ！」

「いい感じに撃ったなメタルグレイモン。」

「ディアドラモンＸＴ後！」

「なにっ！」

「冷酷衝動拳！」

「クロッレオニモンありがとう！」

「ああお互い様だ。」
「デジタルトランスフォーム！」
「何だと！」
「デジクロスした形態でトランスフォームをするのかよ！」
「何たる荒業。メイ！」
「ツワードハンデモンＰ３、アンペアキャノンバースト！」
「アンペアキャノンバースト！」
しかし、アームバレットモンは、ビクともしなかった。
「タイキ。」
「スタースクリームモン、どうしたんだ。」
「俺をシャウトモンとデジクロスさせてくれ。奴を倒すには俺の変形能力がシャウトモンを強くできる。」
「ああ！」
スタースクリームモンは、シャウトモンＸ５の所に来た。
「デジクロスだ！」

「よしっ！シャウトモンＸ５！」「オッケー！」
「スタースクリームモン！」「ふんっ！」
「デジクロス！」「デジクロス！」
スパロウモンの翼に、スタースクリームモンの翼がくっ付き、頭にスタースクリームモンのロボットヘッドが装着され、両腕にアーテックスキャノンとブレードが装着された。
「シャウトモンＸ６！」
「Ｘ６！これなら行けそうだ！」
「アームバレットモン覚悟しろ！デジタルトランスフォーム！」
シャウトモンＸ６が戦闘機にトランスフォームした。
「どう覚悟するんだ？コードブラインデストロファイアー！」
シャウトモンＸ６は、軽やかに避けまくった。
「何だと！」
「デジタルトランスフォーム！アーテックスインパクトレーザー！」
「ぬわぁぁぁぁぁ！」
「止めだ！アーテックスメテオインパクト！」

「そんなはずじゃ、ぐわあああああ！」
アームバレットモンは消滅した。
「やったー！」
「シャウトモンＸ６、これはすごい。メタルグレイモンどう思う？」
「Ｘ６の力に見とれてしまった。」
「俺もだ。」
「よし、アニマル星に向かうぞ。」
クロスハート達は、アニマル星に向かった。
ネオヴァンデモンとブレイクグレイモンとタクティモンとヘドロメルトモンがアニマル星にいた。
ソフロとシアンとクルッポとミアとライバル組が捕まっていた。
「この星も我々、バグラデジデストロン軍のものだ！」
旗を刺そうとした瞬間・・・
「コキューストボールキャノン！」
「何だ？」

第九話　アームバレットモン滅べ！トランスフォームするシャウトモンＸ６（後

次回　第十話タクティモンＶＳディアボロモン宿命の対決！お楽しみに！

合体挿入歌「トランスフォームせよ！Ｘ６」

シャウトモンＸ６どうでしょうか？シャウトモンに変形機能が備わったことによりＸ５を超える力が発動しました。必殺技が二つも出たので満足しています。アニマル星が次の舞台ですが、タクティモン、ネオヴァンデモン、ヘドロメルトモン、ブレイクグレイモンの順に倒されていきます。最後に登場した必殺技「コキューストボールキャノン」これは次回この攻撃をしたデジモンが登場します。

第十話　タクティモンVSディアボロモン宿命の対決！

「コキューストボールキャノン！」

「何奴だ！」

一人の少年と一体のデジモンが現れた。

「俺の名は、深津由布治（みつゆうじ）だ。」

「俺は、グランスガルルモン！」

「クロスハートの新手か？」

「クロスハート？知らないな。グランスガルルモン片を付けるぞ！」

「分かった由布治。」

「はぁあああああ！デジタル覚醒！殺！」

「必殺！イントラスガーウラー！」

グランスガルルモンの牙が巨大化した。

「噛み殺せ！」

「ダークネスフォース！」

グランスガルルモンは、ブレイクグレイモンの攻撃を受けてしまっ

た。

「ちっ、あいつの攻撃か。」

「ギガデストロイヤー！」

「グランスガルルモン避けろー！」

「分かった由布治。」

空から13発のギガデストロイヤーが降り注ぎ、タクティモン達は吹き飛ばされた。

「ちっ、ブルーフレアか。」

「クロスハート連合軍、ただいま参上！」

ディアボロモンは、タクティモンに身勝手に攻撃した。

「まて、ディアボロモン！」

「カストロフィーカノン！」

タクティモンは吹き飛ばされた。

「いったん引くぞ！」

深津由布治とグランスガルルモンは、自己紹介した後、ミア達が助けられていた。

「危なかった。」

「あいつらはいったいなんだ？」

「バグラデジデストロン軍という集団。悪にして最悪な軍団だよ。」

ライムがみんなに言った。

「ディアボロモンが暴走した原因は何なんだ。」

ヤマトがサイクロンに問いかけた。

「俺がデジタルワールドで自分と素質の合う者達を探していた時、ディアボロモンを見つけたんだ。」

過去話

「そこで泣いているのは、ディアボロモン。」

「バグラ軍に俺達の一族を滅ぼされた。俺がなぜ生き残ってしまったのだ。一緒に滅べばよかったのに。くそ、タクティモンが親友のディアボロモンを殺しやがったから俺はもう生きる気力はない。」

「馬鹿かお前は！」

「お前、誰だ。」

「俺は、深海サイクロン。お前はバグラ軍に皆殺しにされた一族で唯一、生き残れた奇跡の存在なんだ。もし、死んだら一族の者たちを裏切ることになるのだぞ！」

「無理だ。バグラ軍に俺一人で立ち向かうことは。」

「無理ではない。俺達が付いている！ダークネスウェーブの仲間になれ！」

「ディアボロモン、一緒に戦おう！」

バルバモン

「お前は、末裔としてその奇跡を果たす時が来たのだ。」

メフィスモン

「ディアボロモン、お前ならどんな苦難を乗り越えられるそしてバグラ軍にひと泡吹かしてやれ！」

アルゴモン

「俺はここで宣言する！ダークネスウェーブの一員として共に戦いたい！バグラ軍に一族の仇を討つためにも！」

「ああ、一緒に友の仇を討とう。」

現在

「そういうことがあったのか。」

「バグラデジデストロン軍め、ディアボロモン一族を滅ぼすとは許せねぇ！タイキ、そう思うだろ！」

「ああ、一族の生き残りになった以上、それなりの苦しみもあるほっとけない！」

ディアボロモンは、アルゴモンと一緒に外に出ていた。

「すまない、タクティモンを見たら暴走してしまって。」

「良いんだ。俺だってお前のことを悲しみにあふれた生き残りとしてお前に与えられる力がない。」

「ディアボロモン君。」

「トピ、俺はどうしても一族の心が届かないんだ。」

「そんなことはないよ。一族は君のために必死になって届けているよ。悲しいことは捨てなきゃいけないんだ。悲しみがあるから届かない。一族の愛を感じるためには、勇気を自分が持つことだと思うから。」

「勇気、俺にそんなものがあるのか。」

「ああ、ディアボロモン。お前は俺だって信用している。一族の仇は絶対撃つんだ。」

「そうだな！こんな時に泣いている場合ではない俺はタクティモンを倒してやる！バグラデジテストロン軍を排除したい。」

その時空から、デジメモリが落ちてきた。

ディアボロモンカストロフィーカノンと描かれていた。
「お前の決意が形になって現れた。」
「まずいタクティモンが。」
「此の宇宙船ごと壊してやる！」
「タイキ、タクティモンの気を引いてくれ！」
「デジメモリ！ディアボロモンカストロフィーカノン！」
3体のディアボロモンが一気にカストロフィーカノンを解き放った。
「なにっどうをぁあああ！」
3体のディアボロモンは、ダークネスウェーブのディアボロモンに勇気と友情を与えた。
「ディアボロモン！」
「サイクロン殿。超進化だ。」
「分かったぜ！ディアボロモン超進化！」
「ディアボロモン超進化！エクサアーマゲモン！」
タクティモンは、攻撃しようとしたのだが・・・
「一族の思いと共に、俺は貴様に仇で討つ！」

「タネガシマ！」

「ゴールデンハルマゲドン！」

「なにっ！ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

タクティモンは消滅した。

「仲間の仇を討ててよかったな。」

「ああ、サイクロン！」

「まだこの星には敵がいる。そいつらを倒さなきゃな！」

「そうだぜ！レイキー！」

第十話　タクティモンＶＳディアボロモン宿命の対決！（後書き）

次回　第十一話　ネオヴァンデモンの策略！立ち上がれキリハとメイ。お楽しみに！

アニマル星での戦いが始まりました。今回は涙が出るストーリーになっていたと思います。ディアボロモン一族がバグラ軍に滅ぼされたという悲しい過去をずっと持ち続けてきたディアボロモンを思うととんでもなく切ない気分になります。最後はタクティモンに仲間の仇を討ちその悲しみはバグラデジテストロン軍を滅ぼせる勇気になりました。次回もお楽しみに！

第十一話　ネオヴァンデモンの策略！立ち上がれキリハとメイ

キリハとメイは、タイキが立てた作戦通りに行動をとり始めた。

「キリハがタイキの作戦を実行するとは。変わったな。」

「メイルバードラモン、俺は強くなければ生きる資格はないと言ったが、いろいろ考えたサイクロンの一人ぼっちになったデジモンを助けたいという強さもあればタイキの苦しんでいるデジモンをほっとくわけにはいかない強さは俺を上回っていた。俺も人のためいや、デジモンのためになるのならその強さを持ちたい。」

メイは、移動手段用のデジモンがいないため、デッカードラモンの背中に乗っていた。

「キリハ君。ネオヴァンデモン対策方法をすでに知っているって？」

「奴にはもう不死の力はあまり残っていない。タイキはそれを狙いに付けて俺とメイを選んだと思う。流石だタイキ！俺がライバルに認定するぐらいの価値観のある選択をしてくれる。」

キリハとメイは、ネオヴァンデモンを見つけた。

「いたぜ！メイ！クロスローダーの準備を。」

「ええ、分かった！」

「リロード、グレイモン、サイバードラモン！」

「リロード、シルギモン、リキトモン、スプレリモン、フリックモン、スパークドックモン！」

「ついに来たか、新しきジェネラルも一緒か。」

「グレイモン、メイルバードラモン！デジクロス！」

「シルギモン、リキトモン、スプレリモン、フリックモン、スパークドックモン！デジクロス！」

「メタルグレイモン！」「ツワードハンデモンＰ５」

「デジクロス形態が二体。楽勝だ。ギガキャディアッグレイド！」

「Ｐ５、ハードマイクロウェーブ！」

「ハードマイクロウェーブ！」

二つの技が相殺した。

「なに、私の技を簡単に相殺するとは・・・ふっふっふっ、面白いお前等のような虫けらどもにいいものを見せてやる！」

ネオヴァンデモンは、テラーコンデジモンズを多く呼び出した。

「何をするつもりだ！」

キリハは、嫌な予感がした。

「ダークネスローダーデジクロス！ネオヴァンデモンネメシスモー

ド！」

「キリハ君、今度はあなたの作戦を使うわ。」

「よし、あいつを倒す方法は、デッカードラモン、サイバードラモン。ツワードハンデモンＰ５とデジクロスしてくれ！」

「キリハ、それは・・・」

「強行突破ではない究極の作戦があるそれは、メタルグレイモン超進化！」

「メタルグレイモン超進化、ジークグレイモン！」

メイは、その作戦に乗った。そうキリハは、目くらまし作戦を行うことにしたのである。

強引な方法に近いがネオヴァンデモンを倒すことができる。

「ツワードハンデモンＰ５、デッカードラモン、サイバードラモン！デジクロス！」

「ツワドハンデドラモン！」

「よしっ、一気に攻めれるポジションに行くぞジークグレイモン！」

「分かったキリハ。」

「メイ、ジークグレイモンに攻撃してくれ！」

「そんなことしたら・・・」

「大丈夫だ！その勢いでトライデントジャスファングをする。」

「分かったわ！ツワドハンデドラモン。」

「任せとけ！ヒーローズドラゴンシュート！」

青い閃光がジークグレイモンの背中を一気に押した。

「トライデントジャスファング！」

「ば、馬鹿な！うわぁぁあああああ！」

ネオヴァンデモンは消滅した。

だが、小型化した姿として残るもツワドハンデドラモンに踏みつぶされて消滅した。

メイとキリハの作戦勝ちであった。しかし・・・

「クラリネットメルト！」

次なる敵が襲いかかった。

第十一話　ネオヴァンデモンの策略！立ち上がれキリハとメイ（後書き）

次回　第十二話　ヘドロメルトモンの脅威！勇者サンジャックモン
現る！お楽しみに
合体挿入歌「スピードの限りダイレクトイエロー！」
今回はキリハとメイの活躍でした。ネオヴァンデモン再びやられました。ところが次のヘドロメルトモンは、漢字による覚醒で攻撃力などが上がります。これは８月３日に連載するデジモンインデックスからの参戦キャラです。敵軍のデジモンとして登場しています。

第十二話　ヘドロメルトモンの脅威！勇者サンジャックモン現る！

「クラリネットメルト！」

キリハとメイは、吹き飛ばされた。

「メイ！」

ツワドハンデドラモンは、ヘドロメルトモンを攻撃しようとするも・・・

「デジタル覚醒、糊！ジャライトアウト！」

「うぁあああ！」

ツワドハンデドラモンは、シルギモン達7体に戻った。

ジークグレイモンもヘドロメルトモンにファイナルストライクスをしたのだが・・・

「君は、甘いね。デジタル覚醒、坤！クラリネットメルト！」

超進化が解けてメタルグレイモンになるも攻撃力の高い攻撃にグレイモンとメイルバードラモンに分離してしまった。

「メイ、大丈夫か。」

「ええ大丈夫ですが・・・私達のデジモンがクロス状態ではなくなっています。」

「かなりの手ごわさだ。漢字を使って覚醒するデジモンは見たことがない。グレイモン、様子を見て攻撃だ！」

「わかったキリハ！」

「シルギモン達も相手の様子を。」

「おう！」

シルギモン達はヘドロメルトモンの隙を突いて攻撃したいのだが・・・

「そんなに俺の隙がつきたいのか。甘すぎるぜ！」

「何だと！」

「テラーコンデジモン達よ、俺とデジクロスだ！」

ヘドロメルトモンパワーモード

「貴様ら9体と2人の息の根を止めてやるよ。デジタル覚醒・・・・」

突然赤い閃光がヘドロメルトモンに襲いかかった。

「誰だ！」

「忘れたか、サンジャックモン様を！」

「サンジャックモン。」
気仙沼大上がキリハとメイに合流した。
「君達、怪我はないか。」
「ああ、大丈夫だ。」
「グレイモン達を撤退させてくれ。」
キリハとメイは、自分達のデジモンをクロスローダーの中に戻した。
「よし、サンジャックモン行くぞ！」
「ああ、これで戦えれるぜ！」

ヘドロメルトモンパワーモードは、斧で攻撃しようとした。
「デジタル覚醒、剣！」
「バーニングシャインソード！」
キリハは、驚いた。
「あのデジヴァイスから漢字が解き放たれてデジモンが覚醒した。」
サンジャックモンとヘドロメルトモンは、武器をぶつけ合った。
「デジタル覚醒、刺！ショットメルトラード！」

「くっ・・・、大上！一気に漢字で覚醒させろ！」

「デジタル覚醒！斬×３！」

「ビクトリオンバースト三連撃！」

ヘドロメルトモンが真っ二つになった。

「しまった！」

ヘドロメルトモンは消滅した。

しばらくしてダークネスウェーブ達が迎えにきた。

「君が大上か。」

「俺は、工藤タイキよろしくな。」

「ああ、サンジャックモンとシャウトモンも仲良くなった。」

「しかし、もう一人いたような気がする。」

メイの言うとおりである。

もう一人、深津由布治がいた。

「グランスガルルモンを離せ！」

ブレイクグレイモンとイーバモンがグランスガルルモンと由布治を

人質にしていた。

第十二話　ヘドロメルトモンの脅威！勇者サンジャックモン現る！（後書き）

次回　第十三話　メガロポリスモン行くぜ！エイトオブノーズのデジクロス。お楽しみに！

覚醒挿入歌「デジタル覚醒～漢字で覚醒～」

ヘドロメルトモンは手ごわい相手でもあります。今回漢字覚醒で圧倒的に強かったと思います。サンジャックモンが来たおかげでみんなが救われました。漢字覚醒というシステムは斬新なアイディアだと自分は思います。次回は地球に場面を戻します。

第十三話　メガロポリスモン行くぜ！エイトオブノーズのデジクロス

バグラデジテストロン軍は、二手に分かれたクロスハート大連合軍を捻り潰す計画が立てられていた。

「バグラモン、その奇策にわしの企画を組み合わせればクロスハート連合軍を一気に叩きのめせます。」

「まて、そう焦るなメガトロモン。」

メガトロモンは、どうも焦りに焦りを重ねていた。

「このままでは宇宙支配はできません。」

「宇宙支配は、じっくりやる！」

「ならばどうしろというのだ。まさか・・・」

「そうだ、新たな将軍を作る計画を立てている。」

ブラックザラックモンとレッドティカスモンは、ドルビックモンと会話をしていた。

「そうか、お前達は、デジサイバトロンの連中に倒された経験を持っているのか。」

「もはやクロスハートは、脅威の存在だ。」

一方、地球では・・・

エイトオブノーズのカズヒサは、ある物体を見ていた。

「あれは・・・まさか！リロード！イヴモン、ショウグモン！」

「何だあれは、カズヒサ。」

ドライバンスモンが勢い地上に降りてきた。

「ドライバンスモンか。厄介だな。」

カズヒサは、もう一体のデジモンをリロードした。

リボルテンダモンである。

イヴモンとショウグモンとリボルテンダモンは、カズヒサの指示通りに動き攻撃を開始した。

「ショックアウト！」「ハンソールセイバリクト！」「トライアングルエアーバスター！」

ドライバンスモンは、避けた。

「バカだね、君達は僕に攻撃は不利だね。ブードスラッシュ！」

ドライバンスモンの素早い攻撃にイヴモン達を圧倒した。

「ドライバンスモン、お前も甘い。」

「何？」

「イヴモン、ショウグモン。デジクロス！」

「メガロポリスモン！」

「ははーん、デジクロスしたか。だが僕のスピードに追い付かない。」

メガロポリスモンは、ドライバンスモンの動きを見きった。

「そこだ！」

「なに！たった一瞬で・・・」

「食らえ、スピーディハイライトセイバー！」

「ぐ、げぁ、どぅ、ホアアアアアア！」

ドライバンスモンは消滅した。

カズヒサは此の事をみんなに報告しに行った。

第十三話　メガロポリスモン行くぜ！エイトオブノーズのデジクロス（後書き）

次回　第十四話　地球が襲撃された！２６のデスジェネラルを倒せ！お楽しみに！

第十四話　地球が襲撃された！２６のデスジェネラルを倒せ！

カズヒサは、みんなに報告しに行こうとした時は遅かった。

「お前も気を失え！」

一方、アニマル星では・・・

ブレイクグレイモンとツワードハンデモンが戦っていた。

「ブレイクフォース！」

「くっ、よけづらい。メイ、スプレリモンとデジクロスさせてくれ。」

「でも、ほかのみんなはやられて体力回復のために。」

「だったら、どうすればいいんだよ。トルネードハンディー！」

「漢字覚醒、絶！トラックフルテンポ！」

「うわぁああ！」

「ツワードハンデモン！」

メイは、サイクロンの気持ちを思っていた。

「メイは、東北の太平洋側出身だろ。」

「そうだけど、何か。」

「実は、大上達もそうなんだ。被災したとはいえ、心を一つにしてイグドラシルという神の存在を蹴散らすとは驚きでいっぱいだ。ディアボロモンそう思うだろ。」

瓦礫の撤去の手伝いをしているディアボロモンは納得してこう言った。

「サイクロン殿、俺達も大上たちみたいに頑張れるかな？」

「ああ、頑張れるさ。絶望なんか、勇気と希望と友情で吹き飛ばしてしまえ！それが俺達の強さだ。」

「ムゲンドラモン、処理を頼む。」

「分かったディアボロモン。」

「ねぇ、サイクロン何か忘れていない。私達が強くなれる四大要素。」

「希望と友情と勇気とあと一つ・・・」

「愛情よ。それで私達が強くなっていくの。ねっ、シルギモン。」

「うん、そうだね。」

メイは、四大要素のことを思い出した。

「そうよ。サイクロンさんが言った四大要素は、今ここに届く！」

ツワードハンデモンは、ボロボロの姿をしながらもなおも、ブレイクグレイモンに立ち向かった。

「死ね、これが恐怖による力だ。」

その時、一筋の光がツワードハンデモンを照らした。

「此の光、デジソウル？」

「あれは、希望のデジソウル。被災したみんなの気持ちがそこにためっている。」

大上はメイに言った。

「メイさん、クロスローダーをその光に。」

「ええ、Gという文字。」

「超進化しよう。メイ。」

「行くよ。ツワードハンデモン超進化！」

「ツワードハンデモン超進化！グレードハンデモン！」

「なっ、超進化した。」

ブレイクグレイモンは少しずつ後ずさりしていった。

「地球に何かがあると人間達は希望のデジソウルを無差別に出す。

それがデジモンに進化を導くものなんだ！」

「ブレイクフォース×3連撃！怯えろ四大要素は絶望に勝てない！」

ブレイクフォース三連撃を打ち砕いたグレードハンデモンは一喝した。

「被災したみんなの気持ちは絶望を破壊できる。その気持ちを逆手に取るような行為は絶体に許されない！バグラデジデストロン軍は地球を支配したと聞いた。ならばお前等の野望を壊して平和を作り出してやる！」

「平和だと反吐が出る！ブレイクサラマンダー！」

グレードハンデモンは、技を砕きそして・・・・

「喰らえ希望の力を！グレードハンティング！」

ブレイクグレイモンは消滅した。

「みんな、急ごう！」

ライム達が急いでいた。

「俺達の星が、バグラデジテストロン軍に占領された。」

「みんなで最悪の敵を倒そう！」

「ああ！」

アニマル星の上にクロスハートの旗が太陽風によって靡いていた。

２６のデスジェネラル達は、地球からクロスハートの旗を見ていた。

「さぁ、地獄を味わえ。」

次回に続く

次回から第二期になります。

第十四話　地球が襲撃された！２６のデスジェネラルを倒せ！（後書き）

次回　第十五話　極寒！シベリアでの激闘。お楽しみに！

第十五話　極寒！シベリアでの決闘

ライム達は、地球へ着こうとしたのだが・・・

「早速すごい数のテラーコンデジモンが来たよ。」

トピが、テラーコンデジモンの大群が襲ってくるの確認した。

「タイキ、此処は俺に任せてくれ。」

「スタースクリームモン。どうしたんだ急に。」

「Ｘ６になって、テラーコンデジモンを殲滅する。」

「分かった。シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、スタースクリームモン。デジクロス！」

「シャウトモンＸ６！」

「デジタルトランスフォーム！」

シャウトモンＸ６は、戦闘機に変形してテラーコンデジモンを殲滅していった。

「スクランブルロッカー！」

暴風と共に放たれるミサイルでテラーコンデジモンを全滅させた。

「デジタルトランスフォーム！」

シャウトモンＸ６は、ある一発のミサイルを見た。

「あれは、まさか！」

アストラエラモンは、ジェットストームモンとデジクロスしていた。

ミサイルが宇宙船に当たった。

「またか！」

「くっ、ディアボロモン、奴にいいものを見せてやれ！」

「サイクロン殿、分かった。カストロフィーカノン！」

しかし、此の攻撃が不時着の引き金を引いてしまった。

「しまった。」

アストラエラモンはジェットストームモンをクロスオープンした。

ジェットストームモンはカストロフィーカノンの攻撃を受けて消滅した。

「ちっ、せっかく面白かったがお前らを吹き飛ばしてやる。デストロイトユニバース！」

「うわぁぁああ！」

宇宙船が大気圏に突入しそうになった時、Ｘ６が止めた。

「くっ、地球の重力で制御が難しい。」

その時、不思議な光が宇宙船とシャウトモンＸ６を包み込んだ。

「此の光で大気圏の摩擦を救ってくれている。」

「何だあの光は、まさか世界中にいる奴らは、バグラデジデストロン軍が拘束したり排除したりしたはずだ。まだいるというのか！」

シベリアの方へ、不思議な光が導いた。

そして着地した。

シャウトモンたちに分離した後、シベリアの寒さにシャウトモンは文句を言っていた。

「ひぇー寒いぜ！」

しかし、安心はできなかった。

アストラエラモンがやってきた。

「我が軍団よ。一気に攻めてやれ！」

ジェットストームモンズとヴィーコンデジモンズ、合計７００体が襲いかかってきた。

「コンボモン、行くぜ。」

「マグナスモン、行きましょう。」
「ジェットモン、殺るぞ！」
「バスターモン、ぶちかまそうぜ！」
「おう！」
「Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」
「コンボモン進化、オプティマスプライモン」
「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン」
「バスターモン進化、ロードキングモン」
「ジェットモン進化、ジェットファイアモン」
「ユニバースオブエヴォリューション！」
「オプティマスプライモン、ゴッドマグナスモン、ロードキングモン、ジェットファイアモン。超ジョグレス進化！プライマスモン！」
「なにっ！」
「行くぞ、銀河の力を受けてみろ！ギャラクシーセイバー！」
ヴィーコンデジモンズとジェットストームモンズが一気に倒された。
「なるほど、プライマスモンの力が分かった。ならば、ブレイクエ

ルドラディモンかかれ！」

「ブレイククェイクショット！」

「体から地震が起きている。そんなものに負けるか！うりぁぁぁぁ！」

「なぬっ！」

「プライマスモン、俺達の力を見せてやれ！」

「分かった！オールムーンインパクト！」

「デジタルワールドの二つの月が、俺のところに向かって・・・・」

どでかい爆発音とともに悲鳴が聞こえた。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ブレイクエルドラディモンは消滅した。

アストラエラモンは、怒りまくった。

「伝説のデジモンごときに俺が倒されるわけにはいかない！」

アストラエラモンがそう言うとダークネスローダーを持ち出した。

「ダークネスローダービットクロス！」

「何だ！」

レンチマンというビーボとデジクロスしたようだ。

「アストラエラモンゾンビーボモード！」

第十五話　極寒！シベリアでの決闘（後書き）

次回　第十六話　ビットワールドからの使者、ダークヘルロン見参！お楽しみに！

第十六話　ビットワールドからの使者、ダークヘルロン見参！

「アストラエラモンゾンビーボモード！」

タイキ達は、焦りを見せ始めていた。

「プライマスモン！」

「分かった。ギャラクシーセイバー！」

しかしアストラエラモンは、ギャラクシーセイバーを止めてしまった。

「なにっ！」

「ふふふ、こんな攻撃、俺には通用しないのだよ。デスクラク！」

プライマスモンを簡単に吹き飛ばしてしまった。

「プライマスモン！」

「此処は、一旦退化して体勢を立て直す。」

４体に分かれ、コンボモン達に退化した。

サイクロンは、ディアボロモン達を繰り出した。

「ディアボロモン、ムゲンドラモン、ギズモンＸＴ。デジクロス！」

「ディアドラモンXT！」

「行け！カストロフィーデストロイヤーだ。」

「サイクロン殿了解した。カストロフィーデストロイヤー！」

ギズモンの赤い光線も加わって強化されたカストロフィーデストロイヤーなのだが、アストラエラモンには効かなかった。

「なぜだ。なぜ効かない。」

「こうなれば、ギズドラシュ！」

「デストロイトユニバース！」

ディアドラモンXTは、一瞬にして吹き飛ばされ、ディアボロモン達3体に戻った。

太一達も応戦しようとしたが・・・

「デジヴァイスがクロスローダーになっている。」

戦い方を知らない太一達には、今の状況は不利である。

「これでは戦いにくい。」

犬沢メイは、シルギモンとリキトモンをデジクロスさせて超進化までさせた。

「グレードハンデモン！」

アストラエラモンは、次の攻撃のスタンバイをしていた。
「そうはさせない。ボンズミヤギフレアパースト！」
熱き思いが巨大な火炎竜巻を生みだして攻撃をした。
「くっ、攻撃を受けたがくたばるわけにはいかない！」
再び巨大なダークボールを作り出したアストラエラモン。
「消えろ！」
「マグマバースト！」
アストラエラモンに命中した。
「何だ？」
「俺は、ダークヘルロン。お前の中からビーボのエネルギーを探知した。」
ビットワールドにいる者たちもやってきた。
「此処は、一旦退くぞ。」
「させるか！」
「レンチマンを返してもらおうか。極悪なデジモンよ。」

「何のことだ。」

「ストロングファイナル！」

アストラエラモンは、炎の災禍にのまれ爆発し元の姿に戻った。

レンチマンは結晶体になり、ビットワールドへと返された。

アストラエラモンは、左肩に深い傷を負った。

「くっ、ビーボの分際で。」

「何で、クロスローダーに変わったんだろう。」

タカトは、疑問に思っていた。

深海サイクロンは、太一達にクロスローダーの使い方を説明した。

「君達に理解はできたと思うが・・・」

「違和感があるけど、やるしかないのね。」

「そう言うことだ。」

一方、アストラエラモンの城・・・・

そこには、ケロガタモン（究極体）、グランドラクモン（究極体）、ヴォルリステロモン（究極体）の三体とヴィーコンデジモンが一万五千体いた。

「アストラエラモン様、左肩の傷は。」

「気にするでない、ヴォルリステロモン。我々は窮地に追い込まれた。ビーボを利用としたが失敗であった。しかし、お前達が対ビーボ&デジモン対策に俺が此処にいるヴィーコンデジモンを強制デジクロスさせる。」

しばらくしてから「強制デジクロス！」

第十六話　ビットワールドからの使者、ダークヘルロン見参！（後書き）

次回　第十七話　軍団を超えたデジクロス！シャイングレイモンXT。お楽しみに！

なんと次回！軍団を超えたデジクロスが出現！

第十七話　軍団を超えたデジクロス！シャイングレイモンＸＴ

一方、クロスハート達は・・・・

大門大のクロスローダーをサイクロンが持っていた。

「ギズモンＸＴ、大のクロスローダーの中に入れ！」

ギズモンＸＴは、大のクロスローダーの中に入った。

「これで、シャイングレイモンとデジクロスできる。今のお前達は、もっと仲間を増やす必要がある。だが、今はこれぐらいが十分だ。」

「サンキュー、サイクロン。ギズモンＸＴ、前では敵だったが今は仲間だぜ！」

「サイクロン、ギズモンＸＴの調子がまだ変だ。」

「大丈夫だディアボロモン。心配せずとも心を解き放つ。」

「流石は、サイクロン殿だ。」

「どうしたんだバルバモン。」

「ディアボロモン、わしは、サイクロン殿の偽悪と正義の心が我々を動かしてくれていると思うのだ。ギズモンＸＴは、きっとそれに動いてほかのジェネラルと組んでも大丈夫と判断したとは、人造デジモンの気持ちもわかってしまうなんて、サイクロン殿は最高のジェネラルだ。」

ミアは、あるものを見た。

「みんな、やってきたよ！」

グランドラクモンとテラーコンデジモンズであった。

「野郎どもかかれ！」

テラーコンデジモンズの数は５０００体もいた。

「とてつもない数だ。」

「リロード、ディアボロモン。」

「タイムミサイルボンバー！」

テラーコンデジモン４００体を消し飛ばした。

「サイクロン殿、数が多い。」

「数が問題なら、私達に任して。」

「シルギモン、リキトモン、スプレリモン、フリックモン、デジクロス！」

「ツワードハンデモンＰ４」

「ハンティングスローモーション！」

テラーコンデジモンズの動きが遅くなった。

「今だ！」

「スリービクトライズ！」

「ギガデストロイヤー！」

「ラブポイズン！」

三体のデジモンの攻撃が、巨大化してテラーコンデジモンを全滅させた。

「クリスタルレボリューション！」

グランドラクモンの攻撃で、デジクロスが解けてしまった。

「サイクロン殿、限界です。」

「分かった。」

「シャウトモン！」「メルヴァモン！」「グレイモン！」

ツワードハンデモンＰ４もデジクロスが解けてしまった。

「シルギモン、リキトモン達！」

「お前達の攻撃は、此の私にはぬるい。」

「そうかよ、リロード、シャイングレイモン。リロード、ギズモン

ＸＴ。」

「よし、行こうかギズモンＸＴ。」

「シャイングレイモン、ギズモンＸＴ、デジクロス！」

「シャイングレイモンＸＴ！」

「これがデジクロス。すげぇ！行くぜ！シャイングレイモンＸＴ！」

「ああ兄貴、シャイニングブラスト！」

グランドラクモンは一切避けなかった。

「なにっ！」

「ふんっ、そんな技私に通用しない。ネオデスガーラディー！」

シャイングレイモンＸＴに当たり、デジクロスが解けた。

「勝てない。サイクロン殿面目ない。」

ギズモンＸＴが初めて喋った。

「お前、喋れたのか。」

サイクロンは、ギズモンＸＴにこう呼びかけた。

「お前偽悪の力を信じて、シャイングレイモンは待ち望んでいる。
お前の力をもう一度見せてやれ！」

「そうだな。すまないシャイングレイモン、大門大。」
「いいってことだ。もう一度デジクロスできるか。」
「ああ、前は確かに倉田というやつに操られていたが今は違う仲間とともに戦える喜びがある。」
「行くぞ！シャイングレイモン！」「おうっ！」
「ギズモンＸＴ　！」「ラジャー！」
「デジクロス！」「デジクロス！」
「シャイングレイモンＸＴ！」
「なんだこの闘志は、私を倒すことができる奴はいないはずでは。」
「それは、お前の見当違いだグランドラクモン。」
「小癪な。ネオデスガーラディー！」
シャイングレイモンＸＴは、盾を作り見事に防いだ。
「効かないな！」
「何だと！」
「これで最後だ。ＸＴＤＥグロリアスバースト！」

「そっ、そんな馬鹿な！ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

グランドラクモンは爆発した後、消滅した。

「すげぇ！」

みんなは、シャイングレイモンだけでなくギズモンＸＴにも感謝をした。

「相棒みたいになったな。大。」

「ああ、これからもギズモンＸＴと組ませてくれ。」

「良いぜ！」

ヴォルリステロモンは、グランドラクモンの消滅を聞き、少しだけ負ける気がしていた。

「奴らに新たなデジクロスが生まれただと。」

「まずいな。うまく攻めなければ。」

「そんなら、こっちが行く。」

「ケロガタモン正気か。クロスハートの連中は新たなデジクロスを生みだしたのだぞ。」

「大丈夫。問題なし。」

第十七話　軍団を超えたデジクロス！シャイングレイモンＸＴ（後書き）

次回　第十八話　新説ダブルクロス！シャウトモンＧＸ。お楽しみに！

次回は、オメガシャウトモンとグレードハンデモンがダブルクロスします。どんな強さなのかお楽しみに！

第十八話　新説ダブルクロス！シャウトモンＧＸ

クロスハート連合軍は、ケロガタモンの警戒に追われていた。

「テラーコンデジモンよ。残りの人質を見つけ次第ひっ捕らえろ！」

戦いがクロスハートに優勢だと思われたが、タイキとサイクロンの作戦が別々の進行を見せた結果失敗に終わってしまった。

サイクロンと太一とヤマトは、うまく隠れることに成功した。

夜になり、まだ警戒をし続けることにした。

「タイキから連絡はあったかサイクロン。」

「太一、こうなったのはケロガタモンに翻弄された俺の責任だ。」

「落ち込むなサイクロン。お前らしくない。」

「ヤマト、すまん。」

「それより、作戦を立て直そう。ケロガタモンに脅威的な攻撃ができればそれでいい。」

サイクロンは、あることを考えた。

「リロード、インフォメーショングレイモン。リロード、ピエモン。」

「リロード、ウォーグレイモン。」

「リロード、メタルガルルモン。」

「ピエモン、作戦内容を報告しろ。」

「サイクロン殿、今回は仲間を救出する作戦だけではないと言ってましたのでは言います。私がテラーコンデジモンに化けて、ケロガタモンに接触した後、サイクロン殿がクロスハート連合軍の旗を掲げて敵襲をしかけます。そのあと、囚われのキリハをヤマトとメタルガルルモンが救出し、太一とウォーグレイモンがテラーコンデジモンにアタックするという作戦です。サイクロンは、バルバモンとディアボロモンで仲間の所へ行き救出そのあと私と合流してケロガタモンを驚かしてから討つという作戦です。成功率は５５パーセントですが、サイクロン殿。」

「十分だ。５５パーセントもあれば行ける。」

太一がサイクロンに言った。

「失敗する可能性もあるというとどうする。」

「戦う前から負けることは一切しないそれがオレ流のやり方だ。ピエモン万が一ばれた場合は、トランプソードで一斉排除を頼む。」

「了解しましたサイクロン殿。」

ピエモンはテラーコンデジモンに化けてこう言った。

「似合ってますか？」

「テラーコンデジモン見たいだぜ、ピエモン。」

「これならばれないぞ。」

「ありがとうウォーグレイモンとメタルガルルモン。ご健闘を祈ります。」

「ああ、ケロガタモンをびっくりさせようぜ！」

ピエモンは、ケロガタモンの基地に入った。

「リロード、ディアボロモン。リロード、バルバモン。」

「サイクロン殿、作戦成功は厳しいかもしれません。」

「ああ、だからこそ面白いのではないのかバルバモン。」

「そうだな。」

ディアボロモンは、キリハを見ていた。

「あれは、タンカーモン。キリハに何をしようとしているんだ。まさか・・・」

「インフォメーショングレイモン、ピエモンが敵陣に入ったぞ！」

「よし！」

クロスハートの旗が上空に出た。

「何！残っているクロスハート軍がいるだと。」

「そうです。俺は命辛々そこから逃げたしてきました。」

「許せん待っていろ！」

「よし、牢屋の所へ行く。」

サイクロン達は、三つに分かれて行動とった。

「太一、メタルヴァンデモンをデジクロスさせろ！そうすればウォーグレイモンに飛翔能力が格段と上がる。」

「分かった。ウォーグレイモン、メタルヴァンデモン。デジクロス！」

「ウォーグレイモンファイダーモード！」

「サンキュー、サイクロン。行くぞ！ウォーグレイモンファイダーモード。」

「ああ、太一。」

テラーコンデジモン達が一気に襲いかかった。

「ブラッドレインミサイル！」

テラーコンデジモンをメタルヴァンデモンの必殺技で消し飛ばした。

ヤマトは、キリハの所に来た。

「キリハ、早速だがデッカードラモンを。」

「どうするつもりだヤマト。」

「デジクロスさせるメタルガルルモンとな。」

「分かった。リロード、デッカードラモン。」

「メタルガルルモン、デッカードラモン。デジクロス。」

「デッカーガルルモン！」

「コキュートストランチャー！」

タンカーモン集団は消滅した。

サイクロンはケロガタモンに出くわした。

「サイクロンとディアボロモンとバルバモン。いい物そろいか。」

「バルバモン、ピエモンの所へ行け！」

「サイクロン殿は？」

「こいつを足止めする。ディアボロモン超進化！」

「ディアボロモン超進化、エクサアーマゲモン！」

「行くぞ！」

「流石、サイクロン殿。」

「後は任せたバルバモン。」

「承知した。ピエモン待っていろよ。」

「まさか、忍び込ませていたとは。テラーコンデジモンに化けさせて敵襲の合図を出すとはよく考えやがって。」

「そうか、俺は物足りなさがあるんだがな。エクサアーマゲモン終わらせろ！」

「ゴールデンハルマゲドン！」

「ふっ、その程度か。」

「なにっ！」

ピエモンは、クロスハート連合軍のみんなを解放した。

「ありがとう、ピエモン。」

「礼なら、サイクロン殿にもしてやってください。」

バルバモンと合流するも敵陣に囲まれてしまった。

「しまった。」

「トランプソード！」

敵陣の一部をピエモンが壊した。

「工藤タイキとシャウトモン、犬沢メイとツワードハンデモン。君達は絆と思いの心が私を驚かすさせるほど感じる。サイクロンの偽悪と正義の心のように。君たちなら新たなダブルクロスが可能だ。サイクロンの支援になる。」

「新たなダブルクロス。」

「分かったわ。行きましょうタイキ君。」

「ああ！」

「此処は、俺達に任せろ！」

一方、サイクロンとエクサアーマゲモンは・・・

「エクサアーマゲモン。しっかりしろ！」

「くっ、強すぎて歯が立たない。」

「更に生き残っている外のテラーコンデジモンとタンカーモン、ダークネスローダーデジクロス！ケロガタモンダークネスモード！」

「なにっ！」

「ハイブラックプレート！」

「ぐわぁぁぁぁぁ！」

「このままでは勝てない。」

「サイクロン！」

「タイキ、メイ！」

「そいつは俺達に任せてくれ。」

「分かった。ディアボロモン戻れ！」

「後は頼むぞタイキ達。」

「行きましょう。」

「ああ、シャウトモン超進化！」「ツワードハンデモン超進化！」

「シャウトモン超進化、オメガシャウトモン！」

「ツワードハンデモン超進化、グレードハンデモン！」

「オメガシャウトモン！」「グレードハンデモン！」「ダブルクロス！」

「オメガシャウトモン、グレードハンデモン。ダブルクロス！シャウトモンGX！」

「何だこの力は。」

「これが、絆と思いの強さだ。ケロガタモン！」

「笑わすな！デッドデスハドー！」

シャウトモンＧＸは、幾分耐えた。

「そんなもの聞くわけがねぇ！今度はこっちの番だ。」

シャウトモンＧＸは、黄金のふわふわした毛で攻撃を開始した。

「静電気がぎゃぁぁぁぁぁ！」

「どうだ、仲間の思いと絆が生み出した静電気の力。」

「くっ、ハイブラックプレート！」

シャウトモンＧＸは、黒き板を破壊した。

「なんだと。」

「これでも食らえ！ボンズロックダマシー！」

絆という漢字書かれた炎がケロガタモンを襲った。

「強すぎる。このままだと死ぬ。」

「シャウトモンＧＸ、止めの一撃を」「刺しなさい！」

「メイ。」「ふっ。」「うん。」

シャウトモンＧＸの頭上に勇気と友情と思いの紋章が高速で宮城県の形を描いた。

「ボンズビクトライズプレッシャー！」

巨大な光の球が、ケロガタモンを襲った。

「嘘だ。勝てないだと。うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

悲鳴をあげてケロガタモンは消滅した。

「すごいよ。シャウトモンＧＸ。」

トピ達も見ていた。

「あれが新たなダブルクロス。」

ヴォルリステロモンは笑っていた。

「だから言わんこっちゃならない。ケロガタモンもグランドラクモンも想定外のデジクロスに負けている。しかしこのままだと俺も想定外のデジクロスに殺される。」

ヴォルリステロモンは笑いながらも顔面蒼白になった。

第十八話　新説ダブルクロス！シャウトモンＧＸ（後書き）

次回第十九話決死迫る策略、ライバル組見参。お楽しみに！
なんだか次回、ヴォルリステロモンいきなり強制デジクロスするようです。ライバル組がどこで登場するか見ものでもあります。次回は更なるデジクロスが誕生します。

第十九話　決死迫る策略、ライバル組見参

ヴォルリステロモンは、アストラエラモンと交信をしていた。

「あの二人は死んだのか。」

「大臣クラスのデジモンは俺だけとなりました。」

「ふんっ、そうか。テラーコンデジモンズとヴィーコンデジモンズとタンカーモンを４５０体ずつ派遣してやる。」

「有り難き喜び。感謝しますアストラエラモン様。」

「我は、感謝されるのが嫌いだ。」

アストラエラモンは、通信を切った後、にやりと笑っていた。

一方、クロスハート連合軍は・・・・

輝二は、タイキ達を呼んだ。

「あれを見てくれ。」

「ダークネスローダーの光。まさか敵はすでに強制デジクロスを。」

「だったらまずいな。既にデジクロスしていると力の差が出る。超進化で一気に攻めるしか方法が無くなるぞ。」

もう一つの宇宙船が飛んできた。

アストラエラモンとヴォルリステロモンダークネスモードは、その宇宙船を攻撃した。

「リロード、メタルヴァンデモン。宇宙船の中にいる者を保護しろ！」

「わかった。」

「その間に、タイキ、キリハ、メイ。超進化の力で行くぞ。」

「ああ！」

４人のクロスローダーが金色に輝いた。

「シャウトモン」「メタルグレイモン」「ディアボロモン」「ツワードハンデモン」

「超進化！」

「オメガシャウトモン！」「ジークグレイモン！」「エクサアーマゲモン！」「グレードハンデモン！」

ダークヘルロンが４体の超進化と共に行動した。

「ダークヘルロン。」

「君達の輝きに導かれた。共に闘い苦戦を超えよう。」

「そうだな。」

アストラエラモンは、超進化形態に攻撃を仕掛けた。
「くっ、やはり強い。」
「俺に任せろ！グレードハンティング！」
「プラズマレールガン！」
アストラエラモンは、くじけなかった。
「効かないね。フォースバイオレント！」
「ぐわぁぁぁ！」「ぐぅぅぅぅ！」
「アルティメットフレア！」
「バカバカしい、そんな攻撃通用しない！」
大次達は言った。
「プライマスモンなら、行けるはず。」
「アストラエラモンの力があれでは。」
「でも、そうだ。ダブルクロスなら行けるかも。」
「よし、それだメイ。」「分かったわ。」
「キリハ、やろうか。」「そうだ行ける。」

「オメガシャウトモン」「オッケー！」
「グレードハンデモン」「よっしゃ！」
「ダブルクロス！シャウトモンＧＸ！」
「エクサアーマゲモン」「おう！」
「ジークグレイモン」「ううううる！」
「ダブルクロス！ディアボロモンＤＸ！」
「ダブルクロス形態が二体。所詮雑魚の祭りにしかならない。」
「ボンズロックダマシー！」「トライデントカノン！」
アストラエラモンに命中して消滅していなかった。
「俺は死なない。これは分身なのさ。」
「なにっ！」
「今だ、ヴォルリステロモンダークネスモード！」
「ああ、たっぷりと遊んでやる。」
ダークヘルロンが止めたが、流れ弾がダブルクロス形態2体に当たってしまった。

「なんとか耐えれた。」
「タイキ、トーヤの力を借りてベルゼブモンとデジクロスさせてくれ。」
「ビーボとデジモンはデータが似ていないんじゃ。」
「でもやってみないと分からない。頼む！」
「トーヤ、ダークヘルロンとベルゼブモンをデジクロスさせる。」
「僕の円陣ならできます。」
ダークヘルロンの頭上に円陣が現れた。
「何だあれは。」
ヴォルリステロモンダークネスモードは、焦りの表情も見せていなかった。
「行くぞベルゼブモン、ダークヘルロン！」「任せろ！」
「ダークヘルロン、ベルゼブモン。超絶クロス！」「超絶クロス！」
「ダークヘルロンDR！」
「雑魚の分際が合体しただけだ。グランドデストロムーン！」
ヴォルリステロモンの攻撃を受けても、ビクともしなかった。

「何・・・」

「ダークヘルロンＤＲ、すげぇ！」

「宿る魔王の２つの意思、それが一つになることとビーボとデジモンの種族を超えた進化合体。確実に倒せれる。」

「何ブツブツ言ってんだ！」

「マグマ・ザ・デスキャノン！」

ヴォルリステロモンの左足に当たった。

「俺の左足が消えた。くっふざけやがる。ロードデスカレーション！」

「攻撃を防げる。お前の攻撃が豆鉄砲のようだ。」

「何だと！」

ダークヘルロンＤＲは、右腕に暴食、左腕に憤怒の紋章が描かれた円陣を出した。

「はあああああああああ！ダブルクライムインパクト！」

巨大な邪悪な紫のビームがヴォルリステロモンに命中した。

そして５回爆発した。

ヴォルリステロモンは消滅した。

ビーボとデジモンに絆がつながった瞬間であった。

「すごい、あの力。」

「まさに超絶だぜ！」

アストラエラモン本体は、少し悔しい表情を浮かべながらも奥の手を隠しているような顔をしていた。

「ベルゼブモン、ご苦労だった。」

「ダークヘルロン、お前も流石な魔王だぜ！」

「ああ、俺も立派な魔王だからな。」

シャウトモンとディアボロモンは、手をつないだ。

「お前といつかはダブルクロスしたい。」

「俺もシャウトモンとダブルクロスできたらうれしい。」

タイキ達は、メタルヴァンデモンが助けた人物を見ていた。

ライムとレイキーが突然こう言った。

「こいつ等、ライバル組の連中だ！」

気を失っているので無事だが・・・・

アストラエラモンの襲来が日本の東北エリアに移動していた。

「ブレイクエルドラディモン１４０体投下！」

「ぐるるあああああ！」

そこにいたのは、東北エリアにいる選ばれし子供たちである。

「リロード！」

「ブロンドモン参上！」「マッハナイトモン参上！」「リボルガモン参上！」「ムゲラピモン参上！」

第十九話　決死迫る策略、ライバル組見参（後書き）

次回　第二十話アストラエラモンの最期、東北エリアを守れ！お楽しみに

ブレイクエルドラディモンが東北に投下される前に選ばれし子供達は間に合うのか。そして何らかの奇跡が巻き起こる。しかし、アストラエラモンの目的を打破することができるのか。

第二十話　アストラエラモンの最期、東北エリアを守れ！

東北エリアにいる選ばれし子供達は、デジモン達で対抗した。

「漢字覚醒！菖。」

「プライドブレイクシャワー！」

「漢字覚醒！丁。」

「オーバースピードキャリバー！」

「漢字覚醒！兎。」

「ソウルムーンバースト！」

「漢字覚醒！舞。」

「螺旋階段紅震！」

「漢字覚醒！射。」

「デッドアロー！」

「漢字覚醒！礼。」

「亡殺恒常豊穣！」

ブレイクエルドラディモンには、傷一つもつかなかった。

「くそ、駄目か。」
「西の方から誰か来るわ。」
「敵か。」
「敵じゃない仲間だ。おーい。」
アストラエラモンは、ブレイクエルドラディモンに命令をした。
「お前等、あいつらを殺れ！」
「ウルドラムファイアー！」
タイキ達は、ブレイクエルドラディモンの攻撃を避けた。
「タイキ、こいつ等を黙らせる。」
「わかった。シャウトモン超進化。」
「メタルグレイモン超進化。」
「ディアボロモン超進化。」
「ツワードハンデモン超進化。」
「シャウトモン、メタルグレイモン、ディアボロモン、ツワードハンデモン超進化！」

「オメガシャウトモン、ジークグレイモン、エクサアーマゲモン、グレードハンデモン！」

「俺達も行くぞ。」「おう！」

「リロード、シャイングレイモン、ギズモンＸＴ。」

「リロード、サンジャックモン。」「リロード、グランスガルルモン。」

「Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」

「オプティマスプライモン、ゴッドマグナスモン、ロードキングモン、ジェットファイアモン。超ジョグレス進化！プライマスモン！」

ブレイクエルドラディモンの２０体は、超進化したデジモンに襲いかかった。

「何だこの馬鹿力は。」

「オメガシャウトモン、任せろグレードハンティング！」

ブレイクエルドラディモンには一切効かなかった。

「なんだと！」

「シャイングレイモン、ギズモンＸＴ。デジクロス！」

「シャイングレイモンＸＴ！」

「ＸＴＤＥグロリアスバースト！」
シャイングレイモンＸＴの攻撃すらも傷が一つつけれない。
「なんて奴だ。」
「プライマスモン！」
「わかった。みんな下がってくれ。はぁぁぁぁぁ！サテライトフルキャノン！」
両肩から放たれたキャノンはブレイクエルドラディモンに少しの傷つけることしかできなかった。
「そんな、私の攻撃で傷が浅いだと。」
「ダークヘルロン、ベルゼブモン。超絶クロス！」「超絶クロス！ダークヘルロンＤＲ！」
「マグマ・ザ・デスキャノン！」
ブレイクエルドラディモン１体を消すことができたがまだ１３９体もいた。
東北エリアでは、子供達がクロスハート連合軍を応援していた。
その応援が、東北地方上空で大きなデジタマとなった。
アストラエラモンは攻撃してもデジタマを割ることができない。

「何だあれは。」

メイのクロスローダーが輝いていた。

「もしかして、これを掲げれば。」

クロスローダーの一筋の光が、デジタマに当たった時、デジタマが孵り、光の球が現れた。

その光の球から、一体のデジモンが誕生した。

「サンタジャパリアモン！」

その神聖なる力は、周りの雲を吹き飛ばした。

アストラエラモンは、ブレイクエルドラディモン２０体に命令をした。

「奴を倒せ！」

「あぁぁぁ！」

サンタジャパリアモンの剣、リアスブレードが震え始めた。

「リアスプライドキャリバー！」

ブレイクエルドラディモン２０体を一気に消滅させた。

「す、すごい。」

「人間の熱き魂が、組み合わさって誕生したデジモン。」
「なんてすごい力だ。」「いっけぇー！サンタジャパリアモン！」
大輔達も応援した。
「殺れ！」
「東北勇気拳！」
ブレイクエルドラディモン３５体が消滅した。
「馬鹿な。ブレイクエルドラディモン１５体で攻撃だ。」
「ジャスティスソウルアタック！」
光に包まれたサンタジャパリアモンの攻撃が、ブレイクエルドラディモン１５体を消滅させた。
左腕の方の部分にホーリーリングがあることに気がついたテイルモン。
「光、あれ。」「ホーリーリング。もしかして。」
アストラエラモンは、ブレイクエルドラディモン３０体で攻撃させた。
リアスブレードを金色に輝かせたサンタジャパリアモン。
「バッドエンドクラッシャー！」

金色の閃光に包まれたブレイクエルドラディモンは消滅していった。
アストラエラモンは怒りのあまりにダークネスローダーを手にした。
「ブレイクエルドラディモンよ、我の力となれ。」
「まずい、デジクロスだ。」
「ダークネスローダーデジクロス！アストラエラモンアースクェイクモード！」
アストラエラモンアースクェイクモードは、サンタジャパリアモンを取り押さえた。
「貴様を殺す。キリイングクェイク！」
「くっ・・・」
「サンタジャパリアモン、負けるな！」
「負けないで、サンタジャパリアモン。」
「サンタジャパリアモンうぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「グレードハンデモン？」
「メイ、サンタジャパリアモンとデジクロスがしたい。」
「分かったわ。」

「共に戦おうグレードハンデモン。」

「何だ！」

「グレードハンデモン、サンタジャパリアモン。デジクロス！」

「サンタハンデモン！」

アストラエラモンは、背筋が凍る思いをした。

「何だこの空気は。」

太一とヤマトは、オメガモン誕生と同じ空気がつつまれていることに気がついた。

「この空気、すごい気分だ。」

サンタハンデモンは高速移動して、アストラエラモンを殴った。

「しまった。」

アストラエラモンは、サンタハンデモンに襲いかかろうするもホーリーリングが邪魔をした。

「なんじゃこりゃ。」

「これが東北の底力でもあり、デジモンの底力でもあり、みんなの力でもある。ブラストストームハリケーン・ネオ！」

アストラエラモンに命中し、体を粉々にした。

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！」

最後の爆発で、アストラエラモンは消滅した。

「どうだ絆の力。」

そのあと、サンタジャパリアモンは、ダイレクトイエローに加入した。

しかし、Ｂエリアのゲートが開いた。

そこにいる凶悪デジモン

頭領　ネソモン

大臣　ダークメガリスモン

大臣　ネロアモン

大臣　ディアガルドモン

大臣　スクラップメタルモン

此の五体の部下、スカルグレイモン４０００体。ガードロモン５０００体。カードラモン５５００体。ハンギョモン６００体。ヴィーコンデジモンズ１５０００体。ミニットネソモン１５体。という数である。

そしてタイキ達の前にやってくる新たなジェネラル。

神戸カスル、夢野寺井立（ゆめのてらいたち）、羽野玉ドン、此の三人は敵か味方か？

次回に続く。

第二十話　アストラエラモンの最期、東北エリアを守れ！（後書き）

次回　第二十一話　３人のジェネラルとお台場大決戦！お楽しみに！
終盤にでた、カスル以外の人物は、アニフレ同盟の絵師さんからきています。犬沢メイや深海サイクロンに続いてです。次回いきなり大臣クラスのデジモンがお台場で暴れます。

第二十一話　3人のジェネラルとお台場大決戦！

スクラップメタルモンは、東京湾にいた。

部下デジモン達に警戒させながら、自分はのんびりしていた。

神戸カスルとミードナモン、夢野寺井立とメカドラコモン、羽野玉ドンとドトルモンは、スクラップメタルモンに気がつかれないように行動をしていた。

タイキ達は、スクラップメタルモンを倒すことにしているがライバル組のアグルの言ったことが気になっていた。

「メイン組のみんなは、タイキ達と一緒に行ってくれ。俺達はここに残る。」

しかし、まだそんなことに気がつかなかった。

ミアがハンギョモンに追いかけられた。

「来ないでー！」

サイクロンはディアボロモンをリロードした。

「ミアさん、伏せていてくれ。タイムリミットミサイル！」

ハンギョモン15体を消滅させた。

「大丈夫か。」

「ありがとう、サイクロンさん。」
「サイクロン、あそこに3人のジェネラルがいる。」
「レインボーブリッジの所で何をしているんだ。まさか大臣級のデジモンがいる。」
拓也は、みんなの戦う闘志を少し沈めた。
「なんでだよ。」
「3人のジェネラルの戦い方が見たいからだよ。」
3人のジェネラルはチャンスが到来したと見た。
「あっちにもジェネラルがいる。」
「ここは、スクラップメタルモンを倒すのにはいい。」
「いくぜ！リロード、カードラモン！」
「リロード、ドルグレモン！」
「リロード、ノートフェイモン！」
「ミードナモン、カードラモン。デジクロス。」
「ミードナットモン！」

「メカドラコモン、ドルグレモン。デジクロス！」
「バスタドラコモン。」
「トドルモン、ノートフェイモン。デジクロス！」
「ノートトドルモン！」
「いっけぇぇぇぇぇぇ！」
スクラップメタルモンはタイキ達の方に自分の軍団を送り込んだことが仇になった。
「しまった。スクラッパルス！」
3体のデジクロス形態は、フォーメーションを取り、攻撃を避けた。
「喰らえ、ナイトストーム！」
「バランスカートファイア！」
「ノートボンバー！」
スクラップメタルモンは、５０ｍ吹き飛ばされた。
「くそ！」
「行けるぞみんな。」
しかし、油断大敵であった。

「ダークネスローダーデジクロス！」

「なにっ！」

スクラップメタルモンは、部下デジモンすべてとデジクロスした。

「スクラップメタルモンダークネスモード！」

「スタンダードヘル！」

3体のデジクロス形態に当たった。

「しまった油断した！」

「このまま橋ごと消し飛ばす！」

「させるかぁぁぁぁぁ！」

エクスブイモンとスティングモンが、スクラップメタルモンダークネスモードの行動を阻止した。

「貴様等、許さん！マグナドライオンキャノン！」

デジクロスの解けたデジモンにまであたり、エクスブイモンとスティングモンにも当たった。

「こうなれば、大輔！」

「ああ、此のクロスローダーで行くぜ！」

「タイキ、シャウトモンと俺達のデジモンをトリプルクロスだ。」
「ああ、シャウトモン超進化！」
「シャウトモン超進化、オメガシャウトモン！」
「行くぜ、エクスブイモン、スティングモン。」
「ああ！」
「オメガシャウトモン、エクスブイモン、スティングモン。トリプルクロス！」
「トリプルクロス！テラードパイルドラモン！」
「クロスハート連合軍ってすごい。」
3人のジェネラルは、クロスハート連合軍に入ることを決意した。
「トリプルクロスだと、舐めやがって。痛快最後の快楽！」
テラードパイルドラモンは、ビクともしなかった。
「そんなもの、此のテラードパイルドラモンには効かねぇんだよ。こっちの番だ！ストロングロックハードクロス！」
スクラップメタルモンに命中して、クロスオープンして難を逃れたが、部下デジモンをすべて失った。

「くそ、次は失敗しない。」

3人のジェネラルが加わったことでますます力がわいているクロスハート連合軍。

スクラップメタルモンは、右手首の一部が消滅しかけていることに気付いた。

「痛みの原因はこれか。くっクロスハート連合軍め、許さないからな。」

第二十一話　3人のジェネラルとお台場大決戦！（後書き）

次回第二十二話　まさかの超進化、ヘルズメタルモン輝け絆のアーマゲモン。
デスジェネラルがまさかの超進化。しかし、サイクロンにも奥の手があった。それは、絆をさらに極めた者にしかできない極進化（きわめしんか）であった。はたして、戦いの行方は？

第二十二話　まさかの超進化、ヘルズメタルモン輝け絆のアーマゲモン

トピ達は、安全な場所にいた。

「いやー、スクラップメタルモンがクロスオープンして逃げるとは。」

「仲間を信頼していないということナリね。」

サイクロンとキリハは、お台場の周りを確認していた。

「何か、分かったかサイクロン。」

「先ほどの戦いで見つけたものがある。」

「これは？」

「よくわからないが、ダークネスローダーの何かが外れていると思われる。」

「強制デジクロスを不可能にできるのならいいが。」

「ああ、小細工されているとしたらまずいかもしれない。」

サイクロンの言う通りであった。

スクラップメタルモンは、ダークネスローダーの暗黒の輝きを見ていた。

「これで、俺も。ククククク。」
ライムは、平和な時間を過ごそうとしていた。
タイキとメイが何かを見つけるまでは・・・
「あれって、スクラップメタルモン。」
「来たか。リロード、シャウトモン。」
「リロード、シルギモン、リキトモン。」
「ダークネスエヴォリューション！」
「なにっ！」
「スクラップメタルモン進化、ヘルズメタルモン！」
「なっ、進化した。」
「どういうことなんだよ。タイキ。」
「ワイズモン、進化した原因を教えてくれ。」
「ん、ダークネスローダーは、デジクロス専用のために作られている。しかしそこには何やら暗黒の力を発揮させる制御がされているからだ。その制御が外れたことが原因で、進化できるようになっている。」
「ということは、制御が外れたせいで。」

「シルギモン、リキトモン。デジクロス！」
「ツワードハンデモン！」
「ツワードハンデモン超進化！」
「ツワードハンデモン超進化、グレードハンデモン。」
「タイキ、こっちも行くぜ。」
「シャウトモン超進化！」
「シャウトモン超進化！オメガシャウトモン！」
「いっけぇー！」
「グレートボンズファイアー！」
「ビートスラッシュ！」
ヘルズメタルモンに命中するも・・・・
「そんな攻撃、通用しない。ヘルマッドネスアウト！」
オメガシャウトモンとグレードハンデモンは攻撃を受けた。
「くっ、ダブルクロスだ。」
「分かった。」

「オメガシャウトモン、グレードハンデモン。ダブルクロス！」
「オメガシャウトモン、グレードハンデモン、ダブルクロス！シャウトモンＧＸ！」
「ヘビーズボンズアタック！」
ヘルズメタルモンに命中したように見えたのだが・・・
「こんな程度では、俺にはかなわない。」
叩きつけられたシャウトモンＧＸは、高層ビルに身を当てられた。
「うわぁぁぁ！」
ライムはトピに言った。
「危ないトピー！」
トピは、エクサアーマゲモンに助けられた。
「怪我ないか。」
「大丈夫ですー。」
トピとライムは、喜んでいた。
「シャウトモンＧＸは、ダウンしている。」

「そうか、クロスオープン。」
「ここは、絆を極めた俺の力を見せてやる。エクサアーマゲモン準備はいいか。」
「ああ、俺はそれを待っていた。サイクロン殿。」「よしっ。」
クロスローダーに極という文字が現れた。
「あれって？」
「エクサアーマゲモン！極進化！」
「エクサアーマゲモン極進化！キワメアーマゲモン！」
「これが絆を極めた者のみにできる更なる進化。」
「すごい。」「極進化、何というパワーだ。」
「いくら進化しても俺にはかなわない。ヘルマッドネスアウト！」
キワメアーマゲモンにはびくともしなかった。
「なにっ！ならばグランドファイアストーム！」
「お前の攻撃、仲間を信頼しない力なんてか弱い！」
ヘルズメタルモンは、キワメアーマゲモンの攻撃を受けまくった、

「強い、強すぎる。」

「終わりにしよう。サイクロン殿。」

「ああ、グレードフレア！」

「グレードフレア！」

「ぎゃゃゃゃゃゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ヘルズメタルモンは消滅した。

「すげぇー！」

ディアボロモンに戻った後、何かを感じた。

「どうしたディアボロモン。」

「なにか、俺と同じ臭いがした。」

「仲間か。」

「分からない。信用性が低いから敵の可能性がある。」

「そうか。よしディアボロモン戻ってくれ。」

「分かった。」

その気配とは、ディアガルドモンであった。

「ふん、わしと同じか。」
久々にくつろげる基地に戻ったタイキ達。
それもつかの間、くさかげとノーアがやってきた。
「大変や、アグリンはんとゼイムはんがえんのや！」
「誰かに連れ去られた。」
「タイキ、俺達に任せてくれ。」
太一とヤマトとタカトと井立がその場所に行くことにした。
メイン組も全員行くことにした。
「ここや、連れ去られた場所。」
「ここって、八郎潟じゃないか。」
「でもなんで連れ去られたんだろう。」
モニタモン達が調査をしていた。
タカトがモニタモンに言った。
「何かわかった。」
「それが、デジモン反応が残っているようですな。」
「デジモン・・・」

ライムとレイキーは、ゼイムとアグルが心配であった。
井立がクロスローダーを首のところまで高く上げた。
「誰が来るぞ。」
「なにっ！」
太一とヤマトも警戒に入った。
スカルグレイモン３００体とガードロモン５００体を連れている２匹の存在がいた。
「もしかして、アグルとゼイム？」
「まさか、闇落ちした。」

第二十二話　まさかの超進化、ヘルズメタルモン輝け絆のアーマゲモン（後書き

次回第二十三話アグル達を救い出せ！許しを乞わないオメガモンの剣。お楽しみに！

アグル達が闇落ちしちゃった。さてライム達の運命はいかに・・・

ディアガルドモンと何か関係しそうな展開です。

第二十三話　アグル達を救い出せ！許しを乞わないオメガモンの剣

アグルとゼイムの目が誰かに操られている目をしていた。

「アグル、どうしたんだスカルグレイモンとガードロモンといっしょに来て。」

「ライム、アグル達の様子どうもおかしいぜ。」

ゼイムが右手を挙げた。

「スカルグレイモン１００体殺れ！」

「なにっ！」

井立が、急いでメカドラコモンとドルグレモンをリロードした。

「メカドラコモン、ドルグレモン。デジクロス！」

「バスタドラコモン！」

「リロード、デュークモン。」

「ロイヤルセイバー！」

スカルグレイモンの６０体は消滅した。

「バスターミトラル！」

スカルグレイモンを４０体消滅させていった。
「アグルとゼイムが敵になってしまったのか。」
「いったんここは引くぞ。」
太一達は、ウォーグレイモンとメタルガルルモンをリロードさせて退避した。
「逃げたか。」
「ガードロモン全軍、追いかけろ。」
「イエッサー！」
ガードロモン達の前にトレイルモンが現れた。
「デジタルトランスフォーム！」
「トレイルモンが変形した。」
羽野玉ドンと犬沢メイと深海サイクロンと大輔がメタルヴァンデモンに乗ってやってきていた。
「トレイルモンズ。デジクロス！」
「ジェーアルエックスモン！」
「ガードロモンを止めていてくれ。」

「分かった。ドンよ。」

ガードロモンは攻撃を仕掛けたが・・・

「俺を激怒させるとグランドロコモンよりひどくなるぜ！爆走皆轢殺！」

ガードロモンは、ジェーアルエックスモンに轢き殺されて消滅し全滅した。

「一丁上がり。」

ディアガルドモンは、ダークネスローダーでスカルグレイモンをデジクロスさせた。

「ゼイムとアグル、残っている奴らはお前等がやれ。」

「分かりました。」

一方、サイクロン達は・・・

「どうして、アグル達があーなったんだよ。」

「物凄く殺意むき出しだったな。」

「怖いよ。元のアグルさん達に戻ってほしい。」

トピは、少しだけ怖くて泣きそうになっていた。

「このままだと、俺達の命が危ない。」

サイクロンは、弱気になっているメイン組を一喝した。

「くだらない！お前達今までの元気さはどこ行ったんだ。たとえ闇落ちしている奴がいるのなら、解決策がある。そいつをぶん殴れ！そうして眼を覚まさせる。タイキが闇落ちしたキリハをそうやって目覚めさせたんだ。」

「でも、強敵だよ。」

「戦う前から、勝つ気でいなければならない。それが俺のやり方でもあり、必殺戦法でもある。俺を信じろライム達よ！」

「確かに此処で弱音を吐いても何も始まらない。サイクロンの言うとおりだ。」

「弱くなれ！グランプールスカルブイレイト！」

ディアガルドモンの攻撃をサイクロン達は受けた。

「くっ、何だ。」

「ディアガルドモンスカリイングモード。」

「ゼイム、アグル。俺達が目を覚まさせてやる！」

ゼイムは、伸ばした爪でライムとウルーシュに襲いかかった。

アグルは、大きな岩を投げ、ひのまるとレイキーとトピに襲いかかった。

「戦う。それが俺達に今できることだ。」

この思いが、太一達のクロスローダーに輝きをもたらとした。

「此の光は。」

ディアガルドモンは、ツワードハンデモンとディアボロモンとメタルガルルモンとウォーグレイモンを取り押さえて苦しめていた。

「何だ？」

ライムの一撃の拳とレイキーの骨の攻撃が、アグルとゼイムにヒットした。

「俺達は、一体？」

「アグルとゼイム、お前等はあのデジモンに操られていたんだ。」

ディアガルドモンは、４体のデジモンをライム達にめがけて投げた。

「お前の行動を許さない。」「ダブルクロス！」

「ダブルクロス！オメガモン！」

オメガモンはディアボロモンとツワードハンデモンを安全なところに移動させた。

「すまんな。我がライバル。オメガモン。」

「ああ、お互い様だ。」

ディアガルドモンは、怒りの必殺技をしかけた。
「死ね！ディアカルヒート！」
オメガモンはその攻撃を防いだ。
「ディアガルドモンそこまでだ。ガルルキャノン！」
ディアガルドモンに命中した。
「聖なる剣でお前の過ちを切り裂くグレイソード！」
「クロスオープン。」
ディアガルドモンはスカルグレイモンを犠牲にしたが誤算だった。
サンタジャパリアモンがいたからである。
「なに、あいつはもしや。」
「オメガモン、グレイソードと私のバッドエンドクラッシャーで終わらせよう。」
「そうか。よしっ、グレイソード！」
「バッドエンドクラッシャー！」
二方からの攻撃に逃げることができなくなったディアガルドモン。

「馬鹿な形勢逆転だと！うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

二方の攻撃を受けたディアガルドモンは消滅した。

アグル達は、くさかげと出会い、クロスハート連合軍の仲間入りした。

ネロアモンは、Ｂエリアの兵力を８割所有していた。

「ディアガルドモンとスクラップメタルモンが死んだのか。」

「どうしますかネロアモン様。」

「心配ない。叩きのめす方法はある。」

その作戦は、カードラモンを東京中で暴れさせて大混乱に陥れることであった。

カードラモン４０００体は、早速東京にリロードされた。

「何だあれは。」

「逃げろー！」

東京が案の定パニック状態になった。

トーマとキリハとタイキが西のエリアのカードラモンを。

サイクロンとネネと太一は、東エリアのカードラモンを。

大次と大上と拓也は、南エリアのカードラモンを。
大輔とタカトと大は、北エリアのカードラモンを倒すことにした。
「何という数で暴れまわっているんだ。」
「タイキ、行くぜ！」
「ああ、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ。デジクロス！」
「デジクロス！シャウトモンＸ４！」
「コンボモン、行こうよ。」
「ああ！同じトランスフォーマー型デジモン同士暴れてやる！」
「ＥＮＥＲＧＯＮ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」
「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」
「リロード！」
「サンジャックモン参上！」
「漢字覚醒とは違う力を見せてやる。」
「サンジャックモン進化！サンジャックモンフェニックスバースト
モード！」

「ダークデリート！」

カードラモンを４体消滅させた。

「リロード、アグニモン。」

「サイバランスサラマンダー！」

カードラモン２０体消滅させた。

「マトリクスキャノン！」

「メガロシャイニングフレア！」

「サラマンダストリーム！」

３体の攻撃がカードラモンを全滅させた。

「南エリア、排除完了。」

第二十三話　アグル達を救い出せ！許しを乞わないオメガモンの剣（後書き）

次回第二十四話ネロアモンの戦力を削れ！お楽しみに！
Bエリアで最大の戦力を持つネロアモンの兵士たちをどうやって削るのか。見どころはまだありそうだ。次に更新される小説では、声優予想が出ます。
著名・隠れ声優予想
深海サイクロン、台風X号さん
ディアボロモン、羽多野渉さん
メタルヴァンデモン、夢夕イタチさん
ムゲンドラモン、梁田清之さん
メフィスモン、台風X号さん
アルゴモン、黒兎（こくと）さん
インフォメーショングレイモン、遠藤守哉さん
バルバモン、台風X号さん
ギズモンXT、武虎さん
犬沢メイ、黒兎さん
シルギモン、今野宏美さん
リキトモン、徳光由禾さん
スプレリモン、楠大典さん
フリックモン、台風X号さん
スパークドックモン、西凛太朗さん
以上です。夢夕イタチさん、黒兎さん勝手ながら声優予想に押してしまいすいませんでした。ほかの声優さんも似合ってそうな気がしたので選別させてしまいました。自分もその罰としていや隠れ声優ということでイメージキャラだけ選別しました。

第二十四話　ネロアモンの戦力を削れ！

北エリアも排除し終えていた。

「タカト、ちょっと休憩しよう。」

「そうだね。」

西のエリアでは、動きの速いカードラモンを捕まえるのに必死になっていた。

「メタルグレイモン、そっちだ。」

「トライデントアーム！」

カードラモンをやっと倒した。

「ミラージュガオガモン、あっちだ。」

「イエス、マスター。」

カードラモンが逃げようとしていたところをシャウトモンがＸ４が通せんぼした。

「挟み撃ちにしたぜ。」

「シャウトモン、ありがとう。ムーンスクラップ！」

「スリービクトライズ！」

シャウトモン達の攻撃でほぼ全滅した。
東のエリアでも、数を着実に減らした。
メイとイクトと知香も駆け付けた時、罠に落ちた。
「俺はネロアモン、お前達が倒したのはほんのちょっとの戦力。ダークネスローダーデジクロスデジクロス！」
カードラモン達が合体した。
「ネクストカードラモン！」
メイは、クロスローダーを取り出した。
「リロード、サンタジャパリアモン。」
「メイさん、あいつは。」
「ネクストカードラモンよ。見るからに強そうだ。」
「私にとって、不足なしの相手です。」
サンタジャパリアモンはネクストカードラモンに剣で攻撃した。
「ジャックスピード！」
「リアスプライドキャリバー！」

サンタジャパリアモンの剣が、ネクストカードラモンの銃に引っ掛かった。

「しまった。」

「死ね、デッドオブショット！」

「うわぁぁぁ！」

「サンタジャパリアモン！」

「そんな。」

しかし剣が見えた。

「東北勇気拳！」

「なにっ！」

煙を払ったサンタジャパリアモンは、一部か消えかけていたのにもかかわらず黒しい表情を見せていなかった。

「なぜだ、そこまで追い込まれているのに。」

「残念だが、私は不老不死のデジモン。だから死なない。」

「不老不死だとふざけやがって。ロードショットイング！」

サンタジャパリアモンは、攻撃を剣で守った。

「こっちの番だな。リアスプライドキャリバー！」
ネクストカードラモンがひるんだ。
「ジャスティスソウルアタック！」
ネクストカードラモンの頭を貫いた。
「やったー。」
「不老不死のデジモン。」
「すごい！」
ネクストカードラモンは消滅した。
「ホーリーリングが輝いている？」
サンジャックモンは、様子がおかしかった。
「どうしたんだ。サンジャックモン。」
「ネロアモンを見つけた。大上。もっと上のランクの進化を。」
「えっ、もっと上。」
サンタジャパリアモンのホーリーリングから輝きが解き放たれた。
「インデックスが神という文字を。もしかして！」

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！サンジャックモン神進化、イザナギモン！」

ネロアモンのいるところをキャッチしたイザナギモンは、その場所の時空を叩き割った。

「ちっ、ばれたか。」

「イザナギモン。これはすごいデジモンが生まれた。」

「サンタジャパリアモン、ありがとうこの力であいつを倒すぜ。」

ネロアモンは苛立ちで攻撃をし始めた。

「ネットナイトメア！」

「森羅万象混沌絶破！」

ネロアモンの攻撃を粉砕しても、ネロアモンに食らわした。

「すげぇーぜ。イザナギモン。」

「ネロアモンは倒れたか。」

しかし、ダークネスローダーを掲げた。

「ダークネスエヴォリューション！ネロアドラモン！」

イザナギモンは、聖なる矛を手にした。

「そんな武器で俺を倒せるものかー！」

「そんなことやってみればわかる！千刹日匠解（せんさつにっしょうかい）！」

ネロアドラモンは、体を１分間に１０００か所貫通された。

「強すぎる。ぎゃゃゃぁぁぁぁ！」

ネロアドラモンは消滅していった。

サンジャックモンに退化した後、サンタジャパリアモンからある称号をもらった。

「私も実は、神人でもある。君に神話核二十六士の一員になってもらおう。」

「やったー！」

「拓也と輝二のデジモンにも二十六士の証が付いていることに気がついたのかい。」

「全然、気がつかなかった。」

「スサノオモンになれるからさ。」

「なるほど。」

みんなが納得していた。

しかし、ダークメガリスモンはあるとてつもない邪悪な作戦を考え

ていた。

「奴等を滅ぼすのにいい方法東京を沈める。」

次回に続く。

第二十四話　ネロアモンの戦力を削れ！（後書き）

次回第二十五話野望を散らせ！ついに登場インフィニティインデックスモン。お楽しみに！
イザナギモンいきなり登場しましたが、サンジャックモンがワープ進化したときの形態です。もちろん究極体です。必殺技は「森羅万象絶破」「千刹日匠解」など

第二十五話　野望を散らせ！ついに登場インフィニティインデックスモン

ダークメガリスモンは、多勢に無勢の雑魚集団を東京に襲わせた。

「この後は、止めを刺す。」

オメガシャウトモンとエクサアーマゲモンが、雑魚集団の排除を行っていた。

「ビートスラッシュ！」「アルティメットフレア！」

雑魚集団を倒すのに一苦労であった。

「リロード、サンタジャパリアモン。」

「よしっ、東北勇気拳！」

サイクロン達は、ダークメガリスモンを見つけた。

「超進化している者たちで一斉攻撃だ！」

「ヘヴィメタルバルカン！」

「ジークフレイム！」

「ファイナルレイン！」

「グレードウェーブブレイク！」

ダークメガリスモンに４つの大技が命中した。

しかし・・・

「君達の攻撃など、俺には聞かぬ。アースペイントライト！」

地響きから巨大な手が現れて、オメガシャウトモン達を取り押さえた。

「抵抗してみろ！ハンドアスペリスガン！」

４体を押しつぶそうとしていた。

「くっ、このままでは。」

「サンジャックモン進化、サンジャックモンフェニックスバーストモード！」

「グランスガルルモン進化、グランスガルルモンブレイクウェーブモード！」

「僕達の震災を超えた力を見せようよ。由布治。」

「ああ、そうだな。」

「行くぞ！」

「サンジャックモン、グランスガルルモン、ジョグレス進化！インフィニティインデックスモン！」

ダークメガリスモンは、インフィニティインデックスモンに拳で攻撃した。

「こいつ、くたばらない。むしろ、攻撃を受けていないだと。」

「これが、勇気と友情と希望が融合した姿だ。インフィニティインデックスモン！」

「勇気大刀槍！」

ダークメガリスモンの右肩を貫通した。

「なっ！」

タカト達は、インフィニティインデックスモンの威力を見た。

「なんてすごい力だ。吹き飛ばされてもおかしくないよ。」

「希望大連弾！」

金色のに輝く攻撃が、ダークメガリスモンに命中した。

「この力は、押されている。ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

大爆発と共に、ダークメガリスモンは消滅した。

「やったー！」

「あれだけの力、すごすぎる。」

「サンジャックモン達の強さがだてではないな。」

「それだけではない。東北守護四元士が三人もそろったことになる。」

ネソモンは、大臣クラスのデータの残骸を見ていた。

「無様すぎる。ダークネスローダーデジクロス。ネソモンダークネスモード！ハハハハハハハハハハハハハ！」

ライム達は、ミニットネソモン４体を確認した。

「あんなところにいたぞ。」

「ちっ、パレたか。」

第二十五話　野望を散らせ！ついに登場インフィニティインデックスモン（後書

次回　第二十六話ミニットネソモンの罠、邪悪なる黒き勇者たち。
お楽しみに！
ミニットネソモンの企んでいることとは一体？

第二十六話　ミニットネソモンの罠、邪悪なる黒き勇者たち

ライム達は、ミニットネソモン４体を追いかけた。

「かなり早いな。」

「急ぐナリ！」

「ちょっと待ってよー！」

そのあとをタイキ達が追った。

ミニットネソモンは、あるビルの中に入った。

「ビルの中に入った。ということは中に何かがいるということだな。」

大輔の予感は的中した。

ネソモンという人間サイズのデスジェネラルがいたのである。

「おやおや、ようこそクロスハートの諸君。」

「お前は誰だ。」

「俺の名は、ネソモン。Ｂエリアのデスジェネラルさ。エリアと行っても、領地をもたないが、その場所の監視に一役買う存在なんだ。しかも、隣にはＯエリアがある。」

ネソモンの口調が軽いことに気がついたタイキは、罠だと感じた。

「みんな、こいつの言っている感じ軽そうだ。罠の可能性がある。」

「見事だな。工藤タイキ、罠を見抜くとは。流石だが東京と共に散るがいい。いでよ、ダーレジェンドデジモン達よ。」

ダークオメガモン、ダークインペリアルドラモン、ダークデュークモン、ダークカイゼルグレイモン、ダークシャイングレイモン、ダークシャウトモン、ダークメタルグレイモン、ダークバリスタモン、ダークドルルモン、ダークスターモンズ、ダークスパロウモン、ダークオプティマスプライモン、ダークゴッドマグナスモン、ダークミッドナイトドラモン、ダークサンジャックモン、ダークグランスガルルモン、ダークマグナモン、ダーククレニアムモン、ダークアルフォースブイドラモン、ダークロードナイトモン、ダークデュナスモン、ダークヒューマズイドモンという数でとてつもない強敵である。

「げっ、かなりやばいぜこの状況。」

「ネソモン、貴様卑怯だぞ。」

「卑怯？そんなことはどうでもいい。お前達は死ぬことにな・・・」

ネソモンの所に攻撃が来た。

陸前チナミ達が来たのである。

「陸前先輩！」

「胸騒ぎがしたから来たけど、こいつらいったい何？」
「リロード、サンタジャパリアモン。」
「メイ、強敵だらけですぞ。」
「ええ、分かってる。でも、このままほっといたら・・・」
「東京は壊滅する。」
「そうはさせない！」
「サンジャックモン進化、イザナギモン！」
「グランスガルルモン進化、スタンダードガルルモン！」
「いっけぇぇぇぇ！」
「俺達も行くぜ！」「おうっ！」
「Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ」
「オプティマスプライモン、ゴッドマグナスモン、ロードキングモン、ジェットファイアモン。超ジョグレス進化！プライマスモン！」
「ギャラクシーセイバー！」
「森羅万象絶破！」
「ストレートマキシマムブレス！」

ダーククレニアムモンは、巨大な盾で防いだ。

「駄目か。」

クロスハート総力戦となっていた。

サンタジャパリアモンは、ダークオメガモンと戦っていた。

「バッドエンドクラッシャー！」

「ダークネスガルルキャノン！」

「攻撃が互角だと。こいつらまさか、前に倒したデスジェネラルを吸収している可能性が高い。」

「なに！」

「面白くなるのはここからだ。ダークネスローダーデジクロス！」

「ダークシャウトモンＸ７！」

「黒いＸ７・・・」

第二十六話　ミニットネソモンの罠、邪悪なる黒き勇者たち（後書き）

次回　第二十七話　奇跡の快進撃、７つの復興デジモン現る。お楽しみに！

第二十七話　奇跡の快進撃、７つの復興デジモン現る

ダークシャウトモンＸ７が突如として現れた。

「そんな、勝てないじゃないか。」

「ノアノックスユニバースリセット！」

「ダーククロスパーニングロッカー！」

攻撃は互角だった。

「なにっ！私の攻撃と互角だと。」

「そうだよ。ダークシャウトモンＸ７、プライマスモンを殺れ！」

「ああ、ネソモン。」

サンタジャパリアモンが剣を黄金に輝かせて攻撃をした。

「バッドエンドクラッシャー！」

ダークオメガモンとダークマグナモンに食い止められた。

「駄目か。悪のロイヤルナイツは、これだけ強いということか。ならば、時間を稼ぐ。」

サンタジャパリアモンの頭上に巨大な円陣が現れた。

「タイキ達、私と同じ性質を持つデジモンに今の危機を教えている間、どうにか戦ってくれないか。」

「分かった。」

「エクサアーマゲモン、極進化！」

「エクサアーマゲモン、極進化！キワメアーマゲモン！」

「キワメフレア！」

ダークオメガモンに命中した。

「よしっ！」

「ダークヘルロン、ベルゼブモン。超絶クロス！」

「ダークヘルロンＤＲ！」

ダークデュークモンがダークヘルロンＤＲに襲いいかかるが・・・

「マグマ・ザ・デスキャノン！」

ダークデュークモンは攻撃を食らい、瀕死の状態になった。

「ダークセブンビクトライズ！」

突然、ダークシャウトモンＸ７の攻撃を食らった。

「くっ、負けるか。」

「そうだ。ここでくたばるわけにはいかない。」
「ああ、イザナギモン。漢字覚醒、鑾！」
「創造動解！」
大きな壁を作り、それを砕いて攻撃をした。
ダークシャウトモンＸ７は、ひるんだ。
「さぁ、７つの復興デジモンよ来てくだされ。」
虹色の環が東京の街を囲んだ。
「何だ？」
「トイラランスノークェイク！」
メジャライトモンの攻撃が、ダークロードナイトモンに当たった。
「サンタジャパリアモンの思い、届いたで。」
ロングルイングモンとエイトサイドモンがやってきた。
「ダークデジモンども、おまいらは、わしがしばいたる覚悟せや！
ウォーバレンダルキャノン！」
「ならば私も、ビックトライデントアーマー！」

ダークマグナモンとダークデュナスモンに攻撃が当たり、消滅した。

ダークロードナイトモンは、グレードハンデモンに攻撃しようとしたが・・・

「ハッピーロイヤルフェニックス！」

ダークロードナイトモンは、消滅した。

エンシェントフェニックスモンが登場した。

第二十七話　奇跡の快進撃、７つの復興デジモン現る（後書き）

次回　第二十八話　ネソモンの失態、８大復興デジモンの勝利。お楽しみに！

第二十八話　ネソモンの失態、８大復興デジモンの勝利

「エンシェントフェニックスモン。」

「君が新しい、復興デジモンか。サンタジャパリアモン。」

「はい、私が新しい復興デジモンです。」

「そうか、君の力を我々が感じた。」

ネソモンは、ダーククレニアムモンで攻撃を仕掛けた。

「ダークエンド・ワルツ！」

ロングルイングモンが攻撃を受け止めた。

「むりやで、あんたらの攻撃では、ワイらは死ぬことも無いんや。ほな今や、エンシェントフェニックスモン。ダーククレニアムモンをしばいたれ！」

「分かった。ハッピーライドキャノン！」

ダーククレニアムモンは、盾で守ろうとするが、盾が破壊され、左腕が飛んだ。

「なっ・・・！」

「わいもいくで！グランドジャッジクロス！」

巨大な天秤が、ダーククレニアムモンを消滅させた。

「ダークネスローダーデジクロス！ネソモングランドダークモード！」

すべてのダークデジモンを吸収した姿となり、かなり危ない存在となった。

「工藤タイキ達、我々を君達のデジモンとデジクロスさせてくれ。そうすれば奴に勝てる。」

「よしっ！オメガシャウトモン、メジャライトモン。」

「ジークグレイモン、エイトサイドモン。」

「ウォーグレイモン、セブントライオンモン。」

「インペリアルドラモン、レジェンドグラサリアモン。」

「デュークモン、レジェンドグロスラマモン。」

「カイゼルグレイモン、エンシェントフェニックスモン。」

「シャイングレイモン、ロングルイングモン。」

「グレードハンデモン、サンタジャパリアモン。」

「フェニックスクロス！」「フェニックスクロス！シャウトモンBX phoenix mode！」

「ＢＸだと。ふざけやがって！ダークオメガブライン！」

「バーニングフェニックスロックンロール！」

ネソモンは、攻撃を受けて、消滅しかけていた。

「ば・・・か・・・な・・・」

「止めだ。サンジャックモン。漢字覚醒、斬！」

「ビクトリオンバースト！」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

ネソモングランドダークモード消滅。

タイキ達は、７体の復興デジモンと別れを告げた。

「デジタルワールドでまた会おうサンタジャパリアモン。」

メイも嬉しい気持ちであった。

次なる敵に迎えてつかの間の休息を取ることになる。

第二十八話　ネソモンの失態、８大復興デジモンの勝利（後書き）

次回第二十九話休息の中で。お楽しみに

第二十九話　休息の中で

スタースクリームモンとメタルヴァンデモンは戦闘機になっていた。

「Cエリアは、アメリカのニューヨークという大都会らしいぞ。」

「ああ、ところで俺達はなんで戦闘機に変形しているんだ？」

「タイキ殿とサイクロン殿に、早めにニューヨークに向かってどういう状況か確認してくれという指示があった。詳しいことはまだあとだ。」

「ということは、少しばかり嫌な予感をしとかなければならないということだな。」

メタルヴァンデモンは、スタースクリームモンの後についてきていてその予感を的中させた。

バンクーバーのある方から、ミサイルが飛んできたのである。

「なんだ？」

「ジェットストームモンズ達だ。」

「どうやら、こっちに来るなら容赦なく撃墜するという脅しか。」

「メタルヴァンデモン、作戦があるのか。」

「もちろん、この事を想定していたからね。バンパイアバスターミ

サイル！」

無数に放たれたミサイルでジェットストームモンズ達は消滅した。

一方・・・

タイキ達は、基地に戻って休憩を取っていた。

「ライム君、これからだね。」

「ああ、でもCエリアに行くとしたらどう行くのだろう？」

「そのことなら心配ない。」

キリハが強気の姿勢で言った。

「キリハさん。」

「俺のメイルバードラモンや、タイキのスタースクリームモンなどに乗れば問題はない。」

「なるほど。」

一方、メタルヴァンデモンとスタースクリームモンは・・・

「数が増えてきているぞ。」

「ヴァーテックスキャノン！」

「ブラッドレインミサイル！」

数を減らせど次々とやってくる敵の兵力に、戸惑っていた。

「こうなれば一旦引こう。」

「そうだな。」

「トランスフォーム！」

メタルヴァンデモン達は戦闘機に変形して、サイクロン達に伝えに言った。

第二十九話　休息の中で（後書き）

次回　第三十話　猛攻に備えて。お楽しみに

第三十話　猛攻に備えて

バルバモンは、メタルヴァンデモン達が来るのを待っていた。

「お、来た来た。」

「バルバモン、緊急事態だ。」

「何があったのか、教えてくれないか。」

「トランスフォーム！ジェットストームモンズの大群がやってきた。」

「なにっ！」

「サイクロン殿達に報告を頼む！」

「了解した。これは急がなければ。」

バルバモンは急いでみんなの方に行った。

「ジェットストームモンズが来たぞ。」

「ナルビームヘル！」

「ヴァンパイアデリートショット！」

ジェットストームモンズは、いくら攻撃しても増え続けていた。

「これではきりがない。」
そこに伝説のデジモン、オニスモンが現れた。
「あれは、オニスモン。」
「ジェットストームモンズ達よ、我と一つになれダークネスローダーデジクロス！」
「早く来てくれタイキ。」「サイクロン殿！」
「オニスモンダークネスモード！」
「デジクロスしたのなら、こっちだってやるぜタイキ。」「ああ、サイクロン。」
「メタルヴァンデモン、スタースクリームモン！デジクロス！」
「デジクロス！ダブルスクリームモン！」
スピードと攻撃と防御が格段と上がった形態になった。
「タイキ、サイクロン殿。」
「ふん小癪な！デッドリーアレード！」
ダブルスクリームモンは、瞬時に避けて攻撃のタイミングを狙った。
「スクランブルブラッドレイン！」

しかし、オニスモンダークネスモードはジェットを使い避けた。
「甘い、そんなような攻撃では。」
「サイクロン殿、バルバモンとデジクロスさせてくれ。」
「ディアボロモン。よしっ！ディアボロモン、バルバモン。デジクロス。」
「ディアバルバモン！」
オニスモンダークネスモードは、ディアバルバモンの小技を避けていた。
「バンデモニウムカノン！」
オニスモンダークネスモードは油断していたのか命中した。
「よしっ、行ったか。」
心の中でバルバモンがディアボロモンにアドバイスをしていた。
「オニスモンはあの程度の攻撃では全く微動だにしていない。」
「なるほど、バルバモン。何か策は？」
「考えがあるがもう少し考えさせてくれ。」
「分かった。」

メイは、グレードハンデモンで倒すことにした。

「グレードハンティング！」

オニスモンダークネスモードは2体のデジクロス形態のデジモンに襲った。

「くっ・・・」

グレードハンデモンにオニスモンダークネスモードの必殺技が襲った。

「エネルギーブラストダイ！」

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

「グレードハンデモン！」

メイのクロスローダーが突如輝いた。

「なに？わっ！」

思いと喜びの紋章が現れた。

「メイ、極進化の光だ！」

「これが極進化。よしっ！グレードハンデモン極進化！」

「グレードハンデモン極進化！キワメハンデモン！」

オニスモンダークネスモードはその輝きから恐怖を抱きはじめた。

「この輝きを壊す！デッドリーアレード！」

キワメハンデモンの手前で技が消えた。

「何だと・・・」

「こっちからだ。キワメスピードハンティング！」

音速のスピードでオニスモンを蹴り続けて消滅寸前まで追い込んだ。

「こ・・この・・まま・・では・・・」

キワメハンデモンの輝きは凄まじいものであった。

「行くぞ！スピリットオブバーストアタック！」

究極な閃光がオニスモンを襲い消滅させた。

第三十話　猛攻に備えて（後書き）

次回第三十一話いよいよアメリカへ、待ち受けるサイダトルトモンの罠。お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6838t/

宇宙(そら)は賑やか

2011年10月30日19時10分発行